

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第135集

寄居町

樋ノ下遺跡

埼玉県住宅供給公社リバーサイド玉淀建設事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

(第2分冊)

1994

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



第18号住居跡



第15号住居跡



第 5 号墳石室

目 次

(第2冊分)

巻頭図版 4 第18号住居跡 第15号住居跡

巻頭図版 5 第5号墳石室

V 古墳時代の遺構と遺物	223
1 概要	223
2 古墳跡と出土遺物	227
3 小結	293
VI 平安時代の遺構と遺物	294
1 概要	294
2 住居跡・土坑と出土遺物	294
(1) 寄居面Ⅰに分布する遺構	294
(2) 段丘崖に分布する遺構	308
(3) 寄居面Ⅱに分布する遺構	311
3 小結	382
VII その他の遺構と遺物	383
1 溝	383
2 護岸工事跡・河川跡	389
3 土坑	391
4 表採・グリッド出土遺物	391
VIII 結	393
付 編 2	394
参考文献	429

插图目次

(第2冊分)

第169図	樋ノ下遺跡全体図	224	第201図	第8号墳石室(1)先葬面	253
第170図	古墳群全体図	225	第202図	第8号墳石室(2)追葬面	254
第171図	第1号墳および出土遺物	227	第203図	第8号墳石室閉塞施設	255
第172図	第1号墳土層図	227	第204図	第8号墳石室根石	256
第173図	第2号墳	228	第205図	第8号墳遺物出土状態(1)	257
第174図	第2号墳土層図	229	第206図	第8号墳遺物出土状態(2)	258
第175図	第2号墳遺物出土状態	229	第207図	第8号墳出土遺物	259
第176図	第2号墳出土遺物	230	第208図	第9号墳	260
第177図	第3号墳	231	第209図	第9号墳出土遺物	261
第178図	第3号墳土層図	232	第210図	第10号墳	262
第179図	第3号墳遺物出土状態	233	第211図	第10号墳出土遺物	262
第180図	第3号墳出土遺物	234	第212図	第11号墳	263
第181図	第4号墳	234	第213図	第11号墳石室	264
第182図	第4号墳石室	235	第214図	第11号墳石室根石	265
第183図	第4号墳出土遺物	235	第215図	第11号墳遺物出土状態	265
第184図	第5号墳	236	第216図	第11号墳出土遺物	266
第185図	第5号墳土層図	237	第217図	第12号墳	267
第186図	第5号墳石室	239	第218図	第12号墳土層図	268
第187図	第5号墳石室閉塞施設	240	第219図	第12号墳出土遺物	268
第188図	第5号墳石室根石	241	第220図	第12号墳主体部掘り方	269
第189図	第5号墳遺物出土状態	242	第221図	第13号墳	270
第190図	第5号墳出土遺物	243	第222図	第14号墳	271
第191図	第6号墳	244	第223図	第15号墳	273
第192図	第6号墳土層図	245	第224図	第15号墳土層図	274
第193図	第6号墳石室閉塞施設 および根石	245	第225図	第15号墳石室根石	274
第194図	第6号墳石室	246	第226図	第15号墳石室	275
第195図	第6号墳人骨出土状態	247	第227図	第15号墳人骨出土状態	276
第196図	第7号墳	248	第228図	第15号墳遺物出土状態	277
第197図	第7号墳土層図	248	第229図	第15号墳出土遺物	278
第198図	第7号墳石室	249	第230図	第16号墳	279
第199図	第8号墳	251	第231図	第16号墳土層図	280
第200図	第8号墳土層図	252	第232図	第16号墳石室	280
			第233図	第16号墳遺物出土状態	281

第234図	第16号墳出土遺物	281
第235図	第17号墳	283
第236図	第17号墳土層図	283
第237図	第17号墳石室	284
第238図	第17号墳石室閉塞施設	285
第239図	第17号墳石室根石	285
第240図	第18号墳	287
第241図	第18号墳石室	288
第242図	第18号墳石室根石	289
第243図	第18号墳遺物出土状態	290
第244図	第18号墳出土遺物	291
第245図	平安時代遺構分布図	296
第246図	寄居面Ⅰの遺構分布	297
第247図	第6号住居跡	298
第248図	第6号住居跡遺物出土状態	299
第249図	第6号住居跡出土遺物	300
第250図	第7号住居跡	301
第251図	第7号住居跡出土遺物	302
第252図	第8・9号住居跡	303
第253図	第8・9号住居跡遺物出土状態	304
第254図	第8・9号住居跡出土遺物	305
第255図	第11号住居跡	306
第256図	第11号住居跡出土遺物	307
第257図	第12号土坑	307
第258図	段丘崖の遺構分布	308
第259図	第10号住居跡・第24号土坑	309
第260図	段丘崖の土坑	310
第261図	寄居面Ⅱの遺構分布(1)	311
第262図	寄居面Ⅱの遺構分布(2)	312
第263図	第14号住居跡	314
第264図	第14号住居跡カマド	315
第265図	第14号住居跡遺物出土状態	316
第266図	第14号住居跡出土遺物(1)	317
第267図	第14号住居跡出土遺物(2)	318
第268図	第14号住居跡出土遺物(3)	319
第269図	第15号住居跡	321

第270図	第15号住居跡掘り方	322
第271図	第15号住居跡カマド	323
第272図	第15号住居跡貯蔵穴	324
第273図	第15号住居跡遺物出土状態	325
第274図	第15号住居跡出土遺物(1)	326
第275図	第15号住居跡出土遺物(2)	327
第276図	第16号住居跡	329
第277図	第16号住居跡カマド	330
第278図	第16号住居跡貯蔵穴	331
第279図	第16号住居跡遺物出土状態	332
第280図	第16号住居跡出土遺物(1)	333
第281図	第16号住居跡出土遺物(2)	334
第282図	第16号住居跡出土遺物(3)	335
第283図	第17号住居跡	337
第284図	第17号住居跡遺物出土状態・ 出土遺物	338
第285図	第18号住居跡カマド	339
第286図	第18号住居跡	340
第287図	第18号住居跡貯蔵穴	341
第288図	第18号住居跡遺物出土状態	342
第289図	第18号住居跡出土遺物	343
第290図	第19号住居跡	345
第291図	第19号住居跡掘り方	346
第292図	第19号住居跡カマド	347
第293図	第19号住居跡遺物出土状態	348
第294図	第19号住居跡出土遺物(1)	349
第295図	第19号住居跡出土遺物(2)	350
第296図	第20号住居跡	352
第297図	第20号住居跡遺物出土状態	353
第298図	第20号住居跡出土遺物	354
第299図	第21号住居跡	355
第300図	第21号住居跡カマド	356
第301図	第21号住居跡貯蔵穴	357
第302図	第21号住居跡遺物出土状態	358
第303図	第21号住居跡出土遺物(1)	359
第304図	第21号住居跡出土遺物(2)	360

第305図	第22号住居跡	362
第306図	第23号住居跡	362
第307図	第23号住居跡遺物出土状態・ 出土遺物	363
第308図	第24号住居跡	364
第309図	第25号住居跡	365
第310図	第26号住居跡	366
第311図	第26号住居跡カマド	367
第312図	第26号住居跡遺物出土状態	368
第313図	第26号住居跡出土遺物(1)	369
第314図	第26号住居跡出土遺物(2)	370
第315図	第1号掘立柱建物跡	372
第316図	第2号掘立柱建物跡	373
第317図	寄居面Ⅱの土坑(1)	379
第318図	寄居面Ⅱの土坑(2)	380
第319図	寄居面Ⅱの土坑出土遺物	381
第320図	第1～3号溝	384
第321図	第4・5・8・9号溝	385
第322図	第6号溝	386
第323図	第7号溝	387
第324図	第6号溝出土遺物	388
第325図	第7号溝出土遺物	388
第326図	護岸工事・河川跡	390
第327図	護岸工事・河川跡土層図	391
第328図	第62・101号土坑	391
第329図	表採・グリッド出土遺物	392
第330図	正竜寺窯出土須恵器の Rb-Sr 分布図	401
第331図	末野 A-1 窯出土須恵器の Rb-Sr 分布図	401
第332図	折原窯灰原出土須恵器の	

	Rb-Sr 分布図	401
第333図	桜沢1号窯出土須恵器の Rb-Sr 分布図	401
第334図	桜沢1号窯出土須恵器の K-Ca 分布図	401
第335図	正竜寺窯灰原出土須恵器の Rb-Sr 分布図	401
第336図	末野群と正竜寺群の相互識別	402
第337図	正竜寺群と折原群の相互識別	402
第338図	正竜寺群と桜沢群の相互識別	402
第339図	桜沢群と末野群の相互識別	402
第340図	桜沢群と折原群の相互識別	403
第341図	正竜寺窯灰原出土須恵器の 化学特性	403
第342図	樋ノ下遺跡出土須恵器の Rb-Sr 分布図	403
第343図	樋ノ下遺跡出土須恵器の K-Ca 分布図	403
第344図	Fe 因子の比較	403
第345図	第4号墳石室構築順序	407
第346図	第16号墳石室構築順序	407
第347図	第5号墳石室構築順序	408
第348図	第6号墳石室構築順序	410
第349図	第7号墳石室構築順序	411
第350図	第8号墳石室構築順序	412
第351図	第11号墳石室構築順序	413
第352図	第15号墳石室構築順序	414
第353図	第17号墳石室構築順序	415
第354図	第18号墳石室構築順序	416
第355図	古墳および構築法編年表	422
付図2	樋ノ下遺跡古墳時代以降遺構全測図	

表 目 次

(第2冊分)

第7表	古墳一覧	226	第20表	第20号住居跡出土遺物	353
第8表	平安時代住居・建物跡一覧	295	第21表	第21号住居跡出土遺物	361
第9表	第6号住居跡出土遺物	301	第22表	第23号住居跡出土遺物	364
第10表	第7号住居跡出土遺物	302	第23表	第26号住居跡出土遺物	367
第11表	第8号住居跡出土遺物	306	第24表	土坑出土遺物	381
第12表	第9号住居跡出土遺物	306	第25表	第6号溝出土遺物	388
第13表	第11号住居跡出土遺物	307	第26表	第7号溝出土遺物	389
第14表	第14号住居跡出土遺物	313	第27表	表採・グリッド出土遺物	392
第15表	第15号住居跡出土遺物	324	第28表	埼玉県内窯跡および樋ノ下遺跡 出土須恵器等の分析値	399
第16表	第16号住居跡出土遺物	332	第29表	樋ノ下遺跡出土須恵器の 産地推定表	400
第17表	第17号住居跡出土遺物	339			
第18表	第18号住居跡出土遺物	344			
第19表	第19号住居跡出土遺物	348			

写真図版目次

(第2冊分)

図版62	樋ノ下遺跡全景、第5～8号墳	図版77	第12号墳、第13号墳
図版63	第1号墳、第2号墳	図版78	第14号墳、第15号墳
図版64	第3号墳	図版79	第15号墳
図版65	第4号墳	図版80	第15号墳、第16号墳
図版66	第5号墳	図版81	第16号墳、第17号墳
図版67	第5号墳	図版82	第17号墳
図版68	第6号墳	図版83	第18号墳
図版69	第6号墳	図版84	第18号墳、古墳群と荒川(第5・ 8・15～18号墳)
図版70	第7号墳	図版85	第6号住居跡
図版71	第7号墳、第8号墳	図版86	第7号住居跡、第8・9号住居跡
図版72	第8号墳	図版87	第8号住居跡、第9号住居跡、第 10号住居跡と第24号土坑、第11号 住居跡、第14号住居跡
図版73	第8号墳、第9号墳	図版88	第14号住居跡、第15号住居跡
図版74	第10号墳、第11号墳		
図版75	第11号墳		
図版76	第12号墳		

- 図版89 第15号住居跡、第16号住居跡
図版90 第16号住居跡
図版91 第17号住居跡、第18号住居跡
図版92 第18号住居跡、第19号住居跡と第
57号土坑
図版93 第19号住居跡、第20号住居跡
図版94 第21号住居跡と第56号土坑
図版95 第22号住居跡、第23号住居跡、第
24号住居跡、第25号住居跡、第26
号住居跡
図版96 第26号住居跡、第1・2号掘立柱
建物跡
図版97 第12号土坑、第25号土坑、第26号
土坑、第27号土坑、第28号土坑、第
29号土坑、第30号土坑、第32号土
坑
図版98 第33号土坑、第34号土坑、第35号
土坑、第36号土坑、第37号土坑、
第38号土坑、第39号土坑、第40・
41号土坑
図版99 第42号土坑、第43号土坑、第44号
土坑、第45号土坑、第46・47号土
坑、第48号土坑、第49号土坑、第
50号土坑
図版100 第51号土坑、第52号土坑、第56
号土坑、第58号土坑、第61号土
坑、第64号土坑、第65号土坑、第
85号土坑
図版101 第6号溝、第7号溝

- 図版102 護岸工事跡(北側)
図版103 護岸工事跡(南側)、樋ノ下遺跡
遠景
図版104 第3・5・8・15号墳出土遺物
図版105 第8・9・11・16・18号墳出土
遺物
図版106 第2・3・4・5・10・12・15
号墳出土遺物
図版107 古墳出土装身具類、古墳出土鉄
製品
図版108 第6・7・9号住居跡出土遺物
図版109 第14・15号住居跡出土遺物
図版110 第16号住居跡出土遺物
図版111 第16号住居跡出土遺物
図版112 第16・18・19号住居跡出土遺物
図版113 第19・20・21号住居跡出土遺物
図版114 第21・26号住居跡出土遺物
図版115 第21号住居跡出土遺物(羽口)、
平安時代住居跡出土鉄製品
図版116 平安時代住居跡出土紡錘車、平
安時代住居跡出土石器
図版117 平安時代住居跡出土石器
図版118 平安時代住居跡出土石器
図版119 平安時代住居跡出土石器、第25
・39号土坑・第7号溝・グリッド
出土遺物
図版120 溝跡出土遺物、表採・グリッド
出土遺物
図版121 古墳出土人骨

V 古墳時代の遺構と遺物

1 概要 (第170図、第7表)

検出されたのは、18基の古墳跡からなる終末期群集墳である。寄居面Ⅱを縦走する旧自然堤防上の微高地に規則的に分布し、北側調査区外にも分布する可能性が高い。南側では第16・17号墳をもって古墳の分布が収束していたが、自然地形の変化や人工的な区画施設はみられなかった。

検出された古墳跡は、すべて周溝をもつ円墳で、周溝がやや不整な形態をとるものが多くみられた。規模は周溝内径で直径を9m前後とするものが多く、最小の第9号墳で長さ5.78m、最大の第12号墳では同19.30mであった。また周溝は、幅・底面のレベルともに一定せず、非常に浅いことを特徴とするが、主体部奥壁後方相当位置にあたる北から、東・西側にかけて深くなるものが多かった。溝中には土坑を形成する場合もあり、内部に平瓶等の土器がみられる場合もあった。

すべての古墳で周溝の一部に陸橋部が設けられており、南向き1カ所を基本にした例が多く認められた。しかし、小形の古墳では方位が一定しない傾向があった。陸橋部は、第3・6・7号墳に顕著にみられるように、隣接した古墳において接近する傾向があり、群構造にかかわる状況を示すものと思われる。

墳丘は中・近世を中心とした開鑿によってほとんど削平されており、わずかに第5号墳にその痕跡が認められる程度であった。墳丘の基底部には細粒砂を含むシルトが用いられていたが、周溝内の堆積土壌の在り方から、上部に粘性の高いローム粒混じりのシルトを用いたものと思われる。これは、地山の層位が逆転したもので、周溝の掘削によって墳丘の土量のほとんどを確保したものと推定される。

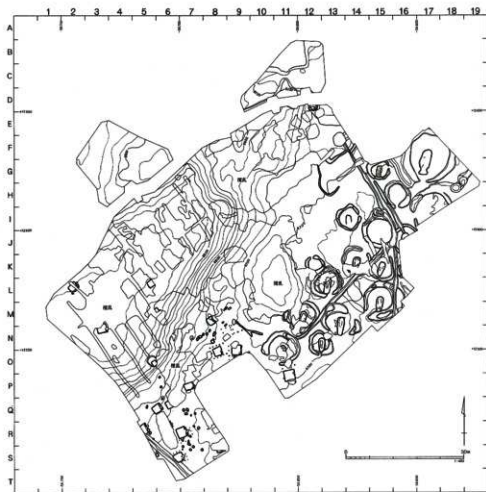
周溝内に落ち込んだ人頭大の転石は量的に少なく、多くの古墳墳裾に練積法による石積施設が設けられていたことが推定される。埴輪は認められなかった。

主体部は、第5・6・7・8・11・15・16・17・18号墳の9基で部分的に残存していた。すべて胴張りのある横穴式石室で、荒川河岸の砂岩系転石および結晶片岩を用いて構築されていた。遺存していたのは石室下部あるいは根石部分などで、いずれも墳丘の削平にともない解体あるいは盗掘を受けていた。

石室は、すべて地山を堅に掘り穿めた整地面に構築されており、玄室と短い羨道および前庭部からなるものであった。構築面の前庭部相当位置に土坑状の掘り込みがあること、玄室の側壁に根石とのずれがみられることなど、構築法において特徴が認められた。閉塞施設は、羨門に砂岩系転石が、玄門に結晶片岩の板石が用いられていたが、羨道部全体が閉塞部として機能した可能性が高い。

このほか、第2・4・12号墳では、堅穴の構築面あるいは破壊された主体部の石材が一部検出され、主体部に関する情報は、合計12基の古墳から得ることができた。

なお、第5・6・8・15・16・18号墳石室内からは人骨の一部が検出されたが、埋葬状態が把握できたのは第8・15号墳に限られる。第8号墳では追葬にともなう棺床面を第一次葬棺床面上に敷



第169図 樋ノ下遺跡全体図

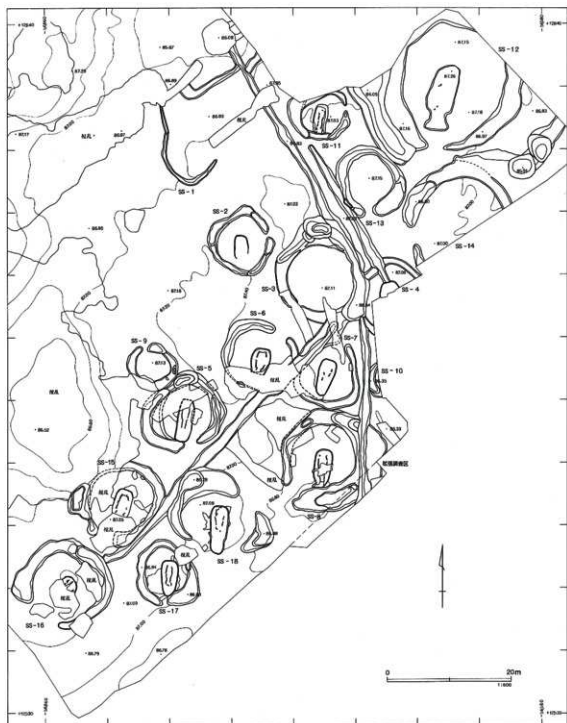
設しており、追葬面において玄室奥壁付近中央から一対の金銅製耳環が出土した。第15号墳では、成人と小児を合葬あるいは追葬したものと考えられる（付編2参照）。

出土遺物は、土器類の他に鉄製品・玉類が認められたが、いずれもきわめて少量であった。

須恵器ではフラスコ形細頸瓶が特徴的で、第8・15号墳では穿孔のある例が検出された。大甕・土師器杯とあわせて、典型的な終末期の様相を呈する。須恵器の多くが前庭部から出土しており、追葬時に掻き出された可能性もある。前庭部東側の周溝内には土坑状の掘り込みがみられ、内部から土師器甕・杯などが出土した。第5・8号墳などでは、細片となって出土しており、故意に打ち割った可能性を指摘できる。

鉄製品は鉄鑑、小刀などがみられ、玉類では滑石製の小玉・丸玉が検出された。

なお当遺跡における古墳群の年代については、出土須恵器より7世紀中頃から後半にかけての短期間に造営されたものと考えられる。



第7表 古墳一覽

番号	形 態 墳 石 室	直 径 最大 最小	溝幅 最大 最小	石 室 規 模							方 位 石 陸	室 構	出土遺物
				全 長	玄室長	羨 幅	最大幅	前 幅	羨道長	幅			
1	円墳	8.23	0.92 0.47										小玉
2	円墳 掘方のみ	8.55 7.55	1.94 0.92								N - 2° - W N - 66° - E		大刀片 須恵器片他
3	円墳	11.04 10.22	3.86 1.22								S - 40° - W		土師甕 須恵平飯他
4	円墳 一部残存	10.14	1.52 0.98										須恵器片 刀子
5	円墳 胴張横穴式	9.72 9.18	3.18 0.80				113	85	152	59	N - 10° - E S - 17° - E		須恵平飯・壺 土師甕・坏・ 人骨
6	円墳 胴張横穴式	10.06	2.24 0.98		263	93	146	60			N - 13° - E N - 39° - E		人骨
7	円墳 胴張横穴式	8.38 8.08	1.62 0.94				*114	61		*72	N - 22° - E N - 32° - E		
8 先 追	円墳 胴張横穴式	11.12 9.62 11.12 9.62	5.32 1.38 5.32 1.38	450 450	*260 *260	*94 *90	124 129		*190 *190	66 66	N - 3° - E S - 42° - W N - 3° - E S - 42° - W		耳環・須恵フ ラスコ形細頸 瓶・土師甕・ 坏片・人骨
9	円墳	5.78 4.54	1.72 0.92								N - 20° - W		土師甕
10	円墳		1.30 0.82										須恵甕片
11	円墳	7.10 5.96	2.77 1.02	*290	*182		*78	51	108	56	N - 10° - E N - 68° - E		鉄鍬 土師坏
12	円墳 掘方のみ	19.30 14.62	3.43 1.20								N - 16° - E S - 10° - W		須恵器片
13	円墳	8.60 7.04	2.84 1.10								S - 3° - W		
14	円墳	15.00	3.02 1.32								S - 80° - W		
15	円墳 胴張横穴式	10.82 10.06	3.32 1.34		*315	62	151	*100			N - 20° - E S - 28° - W		須恵フラスコ 形細頸瓶・ 甕片・人骨
16	円墳 胴張横穴式	11.22 10.26	3.38 1.06			*74	*156				N - 22° - E S - 39° - W		須恵フラスコ 形細頸瓶・ 骨粉
17	円墳 胴張横穴式	7.52 6.80	2.88 1.04	262	188	54	86	64	74	56	N - 5° - E S - 9° - W		
18	円墳 胴張横穴式	11.64 10.74	4.52 0.76	*372	*265		*117	*87	*105	*60	N - 6° - E		丸玉・鉄鍬・ 甕・フラスコ 形細頸瓶・人骨

註 (1) *は推定値

(2) 墳丘規模の単位は m、石室規模の単位は cm

(3) 第8号墳上段は先葬、下段は追葬

(4) 第12号墳の周溝規模は内側周溝の値

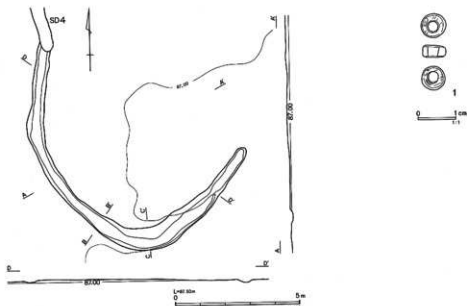
2 古墳跡と出土遺物

第1号墳 (第171～172図)

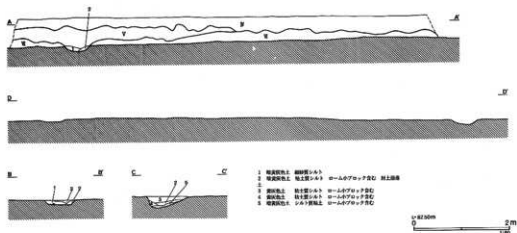
G-12・13、H-12・13グリッドに位置する古墳跡である。旧自然堤防から後背湿地にかかる緩やかな北西側斜面に立地し、標高は87.0mであった。群の主体からやや外れた立地を示す。

外部施設では、墳丘はすでに削平され周溝の南西側底部付近のみが検出された。周溝底面付近には、墳丘方面から流入したローム粒を多量に含む粘土質シルトが堆積しており、墳丘の一部はロームを含む粘土質シルトによって構築されていたものと推定できる。

周溝の平面形態は、南に張り出す不整な円形であった。北西側には近世段階の第4号溝が重複し



第171図 第1号墳および出土遺物



第172図 第1号墳土層図

ていた。東側周溝の切れ目部分には、陸橋部が設けられていたものと思われるが、明確な位置を断定する根拠はない。断面形態は不整な逆台形が基本であった。

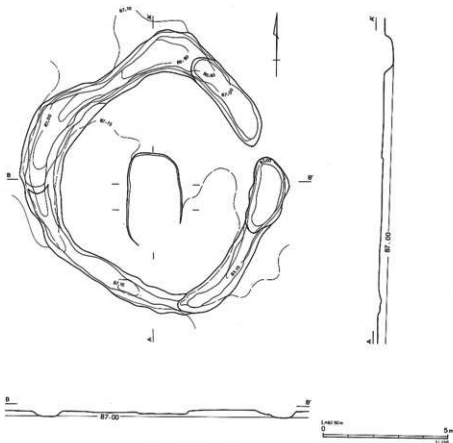
周溝の規模は、残存部の内径8.23m、最大幅0.92m、最小幅0.47m、南側に張り出す部分でもっとも深く、深さ0.24mであった。

出土遺物は周溝で区画された範囲内では検出できなかったが、陸橋部と想定される部分の周溝外側約20cmの位置で、滑石製小玉1個が採集された。淡い褐色を呈し、径6.2～6.3mm、厚さ2.6～3.3mm、孔径2.2～2.5mm、重さ0.19gで、両面とも面取りされ、丁寧にみがかれている。孔内面には穿孔の際の回転による螺旋状の擦痕が、また表面には研磨による平行の擦痕が認められる。出土状況からは、近接する古墳に帰属する場合もあると思われる。

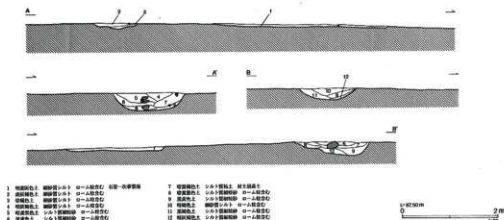
第2号墳（第173～176図）

H-13、I-13・14グリッドに位置する古墳跡である。旧自然堤防から後背湿地への斜面部に立地するが、周溝の南端は旧自然堤防の頂部にかかっていた。古墳群中央部北西側の外縁部にあたり、標高は87.1mであった。南東約1mに第3号墳が、北西約6mには第1号墳が存在する。

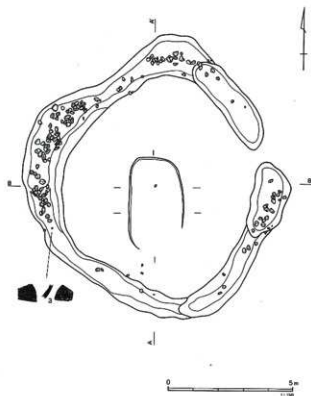
外部施設では、墳丘のすべてが失われており周溝のみが検出された。周溝底面には周溝立ち上がり



第173図 第2号墳



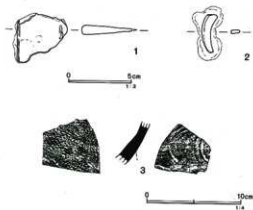
第174図 第2号墳土層図



第175図 第2号墳遺物出土状態

りの崩落とみられるシルト質細粒砂層（9・12層）がわずかに堆積し、その上部にシルト質粘土層と細砂質シルト層の顕著な堆積が認められた。これらは墳丘に由来するものと推定され、墳丘の崩壊は築造後さほどの時間を要せずに始まったものと考えられる。

周溝の平面形態は南北および東西に張り出す不整な円形で、断面形態は不整な逆台形を呈していた。規模は周溝内径で8.55～7.55m、西側で最大幅1.94m、南側で最小幅0.92m、北側部分で最深



第176図 第2号墳出土遺物

周溝底面はレベルが一定せず、主体部側面に相当する東および西側、同奥壁裏側に相当する北側でやや深くなっていた。これは、墳丘・主体部の構築事情に関する特徴と考えられる。

主体部は、墳丘とともに完全に削平されていたが、石室構築面を形成する堅穴の底面付近が遺存していた。堅穴は整った隅円方形を呈し、北側でやや深く、緩い立ち上がりを見せていた。主軸方位はN-2°-Wを指し、現存長で3.25m、最大幅2.20mであった。

堅穴のほぼ中央に5センチ大の玉石1個が検出され、群中における構造的な在り方からみて、第2号墳の主体部も礎床をともなう横穴式石室が採用されていたものと考えられる。

出土遺物はすべて周溝内から検出された。

1は平造大刀片である。地金部分まで酸化がおよび、遺存状態は悪い。錆のため正確な計測値は得られなかったが、現存の刃部幅40mm以上、厚さ7.4mm、重量16.76gである。土層断面のポイントB付近の10層内から出土した。

2は酸化が進み、X線の透過率も低いため判然としなが、鉄鍔あるいは刀装具の一部と考えられる。地金部分の現存長約30mm、厚さ約2mm、幅約7mmで、重量21.3gを量る。

3は須恵器壺の胴部破片である。調整は、外面が格子状タタキ後スリ消し、内面は当て具による同心円状の圧痕が時計回りにつく。焼成は良好で、硬く焼きしめる。色調はやや青みがかった灰色を呈し、胎土は緻密で、石英、白色細粒砂、7mm大の石英質の礫を含む。外面には風化の状況がうかがえ、一定期間外気にさらされたものと考えられる。

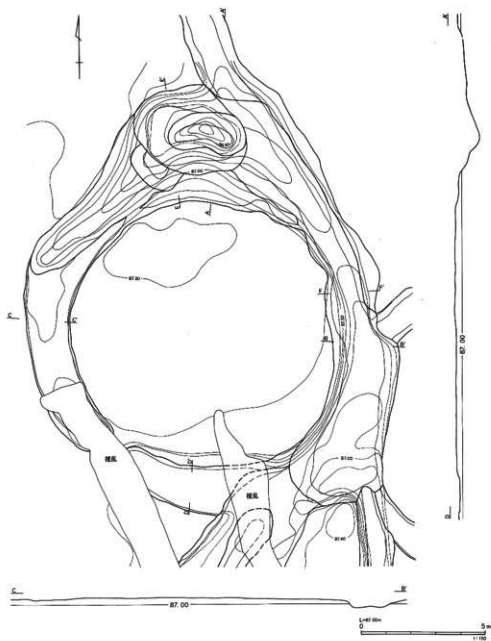
第3号墳（第177～180図）

I-14・15、J-14・15・16グリッドに位置する古墳跡である。旧自然堤防の頂部に立地し、古墳群の主体となる列状分布を構成していた。標高は87.1～87.4mを測り、群中の最高点にあたる。北に第13号墳、西に第2号墳、東に第4号墳、南に第6・7号墳が隣接するが、第2・6・7・13号墳とは2～5mの適度な距離を保っていた。第4号墳とは一部に重複関係があったと考えられるが、当古墳の周溝内を通り、第7・8・10号墳の墳丘を避けるように荒川に向かう第2号溝に攪乱され、先後関係は明らかにできなかった。

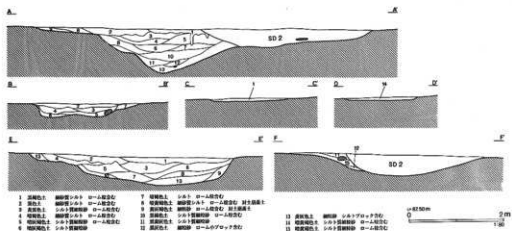
部となり、深さ0.34mを測った。東側には陸橋部が掘り残されており、古墳中央部を起点として、N-66°-Eの方位を指す。

周溝内には、人頭大の砂岩系河原石が疎に流入しており、墳裾の周囲には石積が施されていたと考えられる。河原石は絶対量が少なく、周溝底面付近に墳丘盛土の崩落層に混じって流入していたことから、石積に際しては裏込めを用いない練積法が採られたものと思われる。また、これらの石材は不整な転石がほとんどで構造物には適さず、主体部の破壊にともなうものとは考え難い。

外部施設は、周溝のみが確認された。周溝覆土のうち墳丘の崩落土と思われるのは8層と9層で、細粒砂層の9層がはじめに堆積し、後に細砂質シルト層である8層が流入していた。墳丘が中心部に細砂質シルト層を、周囲に細粒砂層を用いて構築されたことを示すもので、上層に細砂質シルト層、下層に細粒砂層をもつ遺跡基盤の土壌層位が、掘削順のまま用いられたことを反映していると思われる。このことは、墳丘の盛土が周溝からの土砂で随われた可能性を示唆する。周溝の



第177図 第3号墳



第178図 第3号墳土層図

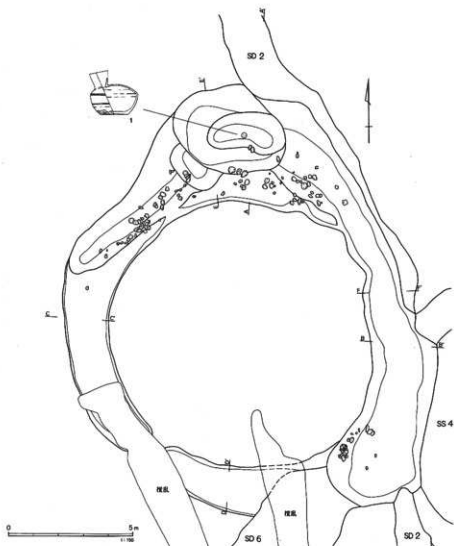
平面形態は東西方向にやや扁平な不整な円形で、北・南東の一部が突出するが、検出された古墳の中では最も整った形態であった。周溝は西から南にかけて浅くなり、古墳中央からS-40°-Wの方位で陸橋部となるものとみられた。しかし、東側から南側にかけて近世段階の第2・6号溝がはしり、さらに戦後の攪乱を受けていたため、陸橋部の正確な位置・形態を捉えることはできなかった。周溝の断面形態は不整形で、底面のレベルは一定しなかった。真北方向の溝内には、土坑状の掘り込みが認められた。土坑状の掘り込みは、主体部奥壁の裏側にあたる位置に存在し、不整の楕円形平面を呈していた。主体部北側の周溝が深く掘削されるという意味では、第2号墳と類似の構造である。西側にテラス状部分がみられ、東側でより深く掘りこまれていた。規模は長軸で4.60m、短軸で3.68m、テラス状部分の深さ0.56m、一段深い部分の長軸3.10m、同短軸1.70m、深さ約0.90mであった。底面中央部からは口縁部を欠く平瓶が逆位で出土した。水平を保って倒立していたこと、内部に土壌の流入がなかったことなどから、内部に伏せた形で設置されたものと考えられる。

堆積土壌に埋め戻された形跡はなく、自然堆積と考えられた。中間層にみられる黒色の有機質土壌(10~12層)は埋没過程における水成土壌で、特殊性のない堆積層である。層位断面の観察にかぎり、この掘り込みと周溝に時間差は認められず周溝にともなう施設と考えてよい。しかし、周溝が掘り直されている場合、あるいは定期的に清掃される場合にはこの限りではない。なお、溝中埋葬を支持する積極的な状況はみられず、土器の設置をともなう行為に関わる施設であると考えられる。これらの状況からみて、この掘り込みは土坑と考えてよいだろう。

また、周溝内には人頭大の河原石が点在したが、北側の深い部分に限られ、大部分は第2号溝の覆土中から出土した。近世段階に墳丘の破壊があったことを示すものであろう。

周溝規模は内径で最大11.04m、最小10.22mを測り、最大値では群中4番目の規模であった。周溝幅は溝中土坑にかかる部分で最大3.86m、南西側で最小1.22mであった。

出土遺物は、すべて周溝内から出土した。1は須恵器平瓶である。周溝北側の溝中の土坑中央部底面に倒立状態で出土した。口縁部を欠き、人為的に破損させた可能性がある。底部は中央がやや窪み、体部は下半で丸みをもちながらも上半はほぼ直線的に立ち上がる。体部中央には弱い沈線1



第179図 第3号墳遺物出土状態

条がめぐる。肩部は明瞭な稜をなし、2条の弱い沈線がめぐる。肩部以上には自然釉が散漫にかかる。底部は回転ヘラ切り後、手持ちヘラケズリが施される。焼成は良好で、灰色に硬く焼きしめる。胎土は緻密で、長石・石英・黒色細粒砂・白色細粒砂を含む。南北企産か。肩部径15.3cm、頸基部径4.4cm、底径9.0cm、肩高9.7cmを測る。体部上面の円形粘土板による蓋は、径9.2cmである。

2は須恵器甕である。外面には平行タキが施される。焼成はやや不良で、内面のもろさが特徴的である。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土には石英、黒雲母、酸化鉄粒、黒色および白色細粒砂を含む。末野窯跡群産か。風化が進行している。

3は土師器甕の口縁部である。風化のため調整は観察できない。焼成は良好で、器壁はやや薄く3mm程度である。色調は橙色を呈し、胎土に石英、黒雲母、酸化鉄粒、白色細粒砂を含む。他に、外面ヘラケズリが施される胴部破片3片があり、同一個体と思われるが、接合関係はない。



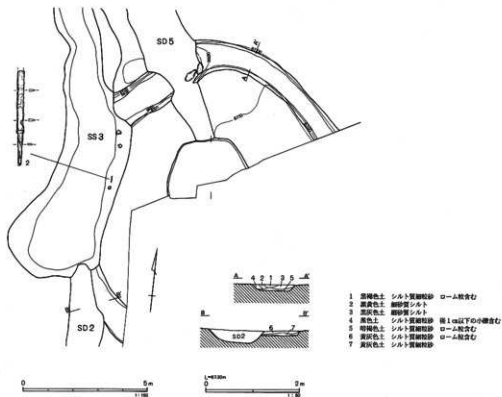
第180図 第3号墳出土遺物

第4号墳（第181～183図）

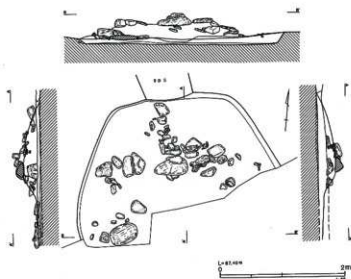
I-16、J-16グリッドに位置する古墳跡である。旧自然堤防の南斜面に立地し、群の主体を構成する。北北西に第3号墳、北東に第14号墳、南に第10号墳が隣接していた。標高は87.0mであった。南半部が調査区外にかかり、主体部・陸橋部の状況は明確にできなかった。西側で第3号墳と重複すると考えられるが、第2号溝による攪乱のため新旧関係は不明であった。北側周溝から主体部にかけて第5号溝による攪乱を受けていた。

外部施設では、墳丘はすでに削平されており、周溝のみが検出された。

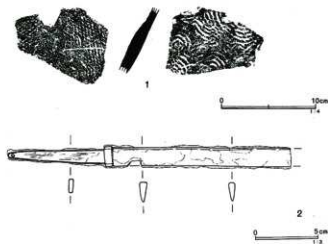
周溝の平面形態は北西に伸びる不整な円形で、陸橋部は検出できなかった。断面形態は不整な逆



第181図 第4号墳



第182図 第4号墳石室



第183図 第4号墳出土遺物

台形を基本とし、底面のレベルはほぼ一定であった。規模は周溝内径で10.14m、最大幅1.52m、最小幅0.98m、北西側の最深部で深さ0.14mを測った。

主体部は、調査区域にかかる人家のブロック塀取り付けにともなう掘削で、ほぼ完全に破壊されていたが、遺存した石材と群全体の様相から横穴式石室と推定された。堅穴の掘り方をもって石室構築面が形成されていた。

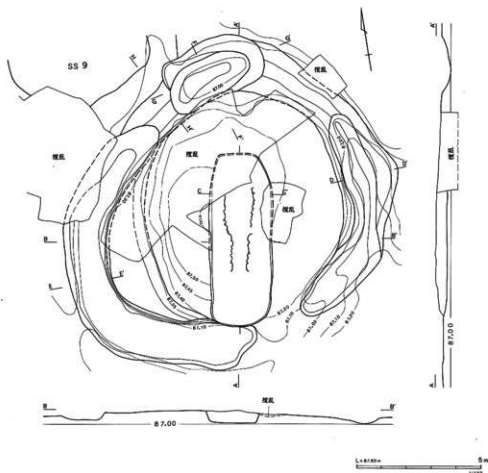
遺存部分は玄室奥壁後部および左側壁奥部の裏込め、または根石石材の一部であると考えられる。奥壁後部相当位置では、長さ30～50cmほどの細粒砂岩の河原石を裏込めまたは控え積みに使用したもので、量的に少ないことから土と混合した様相がうかがえた。左側壁部分では、根石と思われる大形の結晶片岩1個と複数個の河原石が検出されたにとどまる。

石室構築面の掘り方は地山を堅に直接掘りこんだもので、他の古墳と共通する。整った隅丸方形または楕円形平面を呈すると思われ、断面は逆台形であった。規模は、検出された範囲内で幅3.2m以上、深さ0.18m以上であった。

上のような遺存石材・掘り方の状態から、第4号墳の石室は最大幅約150cm前後の胴張りをもつ形態であったと推定できる。

出土遺物は、すべて周溝内から検出された。

1は須恵器甕の胴部片である。外面には格子状タタキが施され、内面には青海波紋状の当て具痕がのこる。焼成はやや不良で、色調は外面灰色、内面灰白色を呈する。胎土には石英、黒雲母、黒



第184図 第5号墳

・白色細粒砂、小礫が含まれる。

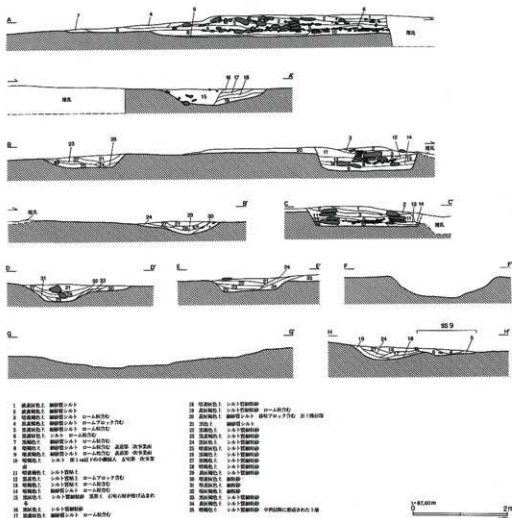
2は小刀である。西側周溝の立ち上がり面直上で検出された。先端部を欠く。平造、両関で、把元金具および把頭に目貫穴がみられる。現存長22.5cm、刃部幅15.3cm、厚さ5.2cm、重量53.46gを量る。

第5号墳（第184～190図）

K-12・13、L-12・13グリッドに位置する。旧自然堤防の頂部に連なる列状分布の南部を構成していた。標高は87.2mであった。

北西に隣接する第9号墳とは、周溝に重複関係が認められた。周溝覆土の状態からは、第5号墳が先行するものと思われた。北東には第6号墳、南に第18号墳、南西に第15号墳が位置するが、いずれも3.6mの距離を保っている。

第5号墳は、今回の調査で唯一墳丘の痕跡が検出された例である。



第185図 第5号墳土層図

墳丘は、主体部の西側で検出されたもので、高さ15cm程度が遺存していたにとどまる。工場建築物の基礎および解体による攪乱によって北西部の大半が破壊されているため、厚さ約20cm～1mにのぼる攪乱土を取り除いた後に、形態および範囲を確認した。

遺存した墳丘の形態は、南北に長い楕円形であった。こうした形状は周溝内部の面積および主体部をなす石室の規模、土量による制約などを受けた結果とも考えられるが、周溝の重みを考慮した場合、墳丘そのものを円形にするためには、周溝内の面積と形態からみて、現墳丘遺存部分とこれ以東の周溝に囲まれる範囲に墳丘を構築する必要があったためと思われる。墳丘を構成する20層は、細砂質シルトでブロック状の土塊を固めたものであるが版築の形跡は認められなかった。しかし、盛土(20層)が検出された範囲は南西側の一部に限られるため、構築状況全般について言及するものではない。

周溝の平面形態は、北東および南西に長い不整の楕円形を呈し、石室前庭部の南東延長上に陸橋

部を確認した。陸橋部の方位は、古墳中央を起点にS-17°-Eであった。周溝の断面形態は部分的に整った逆台形であったが、一般に不整形であった。

規模は周溝内径で最大9.72m、最小9.18m、最大幅3.18m、最小幅0.80mを測った。周溝底面のレベルは一定せず、主体部両側にあたる東および西側でやや深く、40cm程度であった。

石室奥壁後方にあたる北側部分にはいわゆる溝中土坑が掘り込まれ、最深くで深さ約50cmを測った。土坑の形態は不整な楕円形を呈し、2段階を経て掘削された様子が認められた。第3号墳に共通する特徴である。堆積土壌の状況についても第3号墳に酷似し、埋葬等の特殊な状況を示す情報は得られなかった。

周溝内には人頭大の砂岩系河原石が流れ込んでおり、墳裾に石積があったことが推定できる。石材の量、および裏込め土の遺存が認められないことから、練積法によるものと思われる。

周溝の北東部分では、第9号墳との重複関係が認められた。重複部分の層序からみると、第9号墳は第5号墳の周溝が20cm前後埋没した後に造営されたものと考えられた。しかし、地盤がシルト質細粒砂層であるため、降雨の影響などで短期間に埋没した可能性が高く、有意な時間的差異を表わすものとは断定できない。なお、土層図中に示した第9号墳周溝の土層番号は、第9号墳の土層説明に従うものである。

主体部は、胴張りをもつ横穴式石室であった。構築面は、堅穴の掘り方をもって形成されていた。墳丘の削平と同時に石室の破壊が行なわれた模様で、天井石および側壁上部は完全に失われていた。また、玄室奥部が攪乱を受けていたが、調査したうちでもっとも遺存状態のよい石室であった。

玄室側壁にはゆるやかな胴張りがみられ、羨道の位置がやや東にずれるため、左側壁にはより顕著な胴張りが認められた。側壁の石材は砂岩系河原石を主体とし、部分的に結晶片岩が用いられていた。横方向に平行積みする、いわゆる布積みで、長さ30-50cmほどの扁平楕円・棒状・板状の石材を小口積みし、間隙には棒状の細粒砂岩の河原石が充填されていた。奥壁および右側壁が攪乱を受けており、結晶片岩の板石を用いたと考えられる奥壁は完全に失われていた。

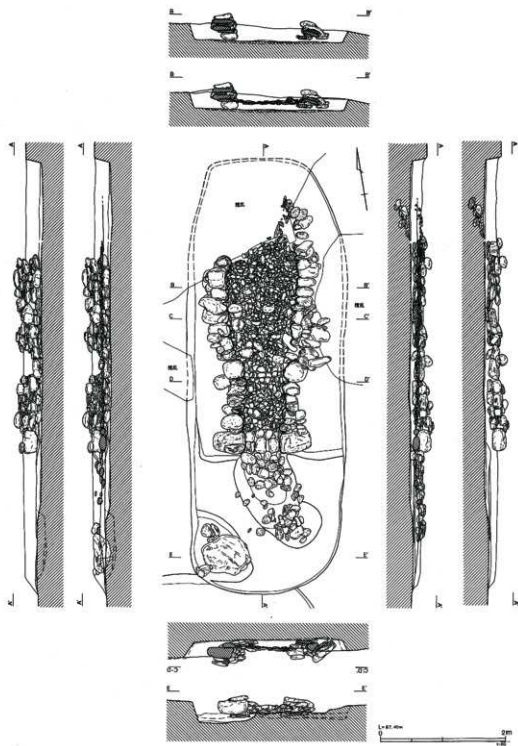
棺床面には径10cm以下の玉石がすき間なく敷き詰められていた。扁平な玉石は玄門側のものが奥壁側のものの上部3分の1程度に重なるようにおかれており、玄室奥部から敷設したものと考えられる。

玄門部側壁にはやや大きめの石材が用いられ、玄室側壁と羨道が連続する面から5cm程度内部に突出することにより、平面プランにおいて門柱石状の空間配列を構成していた。

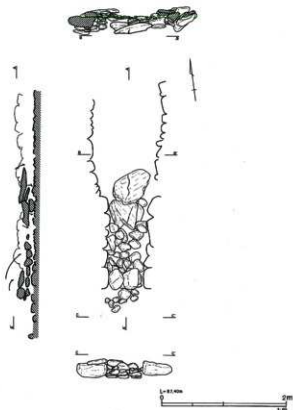
羨道は短く極めて幅の狭いもので、河原石の布積みによって構築されていた。羨道部分に敷設された玉石は、径約15cm程度と玄室よりも一回り大きく、埋葬空間との区別が視覚的に行なわれていた。羨門には長さ50cmを越える河原石が用いられ、床面には閉塞施設を支える長さ20cm前後の河原石が据えられていた。

前庭部は径20cm以上の不整な河原石を敷設したもので、1.4mほどの長さを測った。前庭部先端西側には巨石の存在がみられるが、群中に他例がなく、第5号墳にともなう施設であると断定できない。しかし、周囲に置かれた転石の状態からみて、前庭部の一部である可能性は高い。

閉塞施設は玄門と羨門に認められ、玄門の閉塞は緑泥石片岩の板石2枚を中心に河原石で周囲を



第186図 第5号墳石室



第187図 第5号墳石室閉塞施設

根固めし、羨門の閉塞は径20cm前後の砂岩系河原石を積み上げて行われていた。なお、図中の矢印は、閉塞施設の崩壊の方向を示す。

石室の下部構造は、竪に掘り込んだ構築面と根石を中心とする。掘り込み部分は、前庭部を含め周溝の一部に干渉している。平面形は整った隅丸長方形を呈し、断面は逆台形であった。また立ち上がりはほぼ垂直であった。前庭部および石室内部を除く部分は、他の部分より一段高く掘り残されていた。設計・作業方法などに関わる工法を示すものと考えられる。

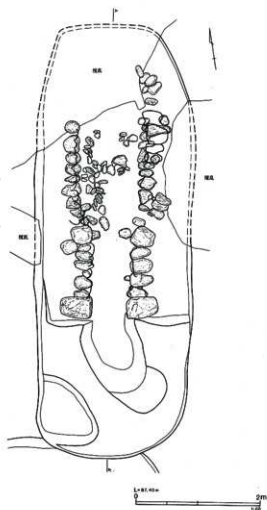
堅穴底面には、シルト層（10層）および細砂質シルト層（9層）の整地層を敷き、羨道部で

はさらに細砂質シルト層（8層）を重ねることによって、石室事業面が形成されていた。周溝部分は堅穴にこれらの整地層を埋め戻した後、掘削されたものと思われる。

根石については、玄室と羨道で異なる様相を示していた。玄室側壁の根石には結晶片岩が多用されており、側壁上部の石材に比べて小形で、大きさを整えることを目的に加工を施したものも存在した。玄室における根石の設置は胴張りにかかわらず直線的で、側壁最下段の石材と最大10cmのずれをもって、内側に突出するように設置されていた。その一方で、羨道部の根石は砂岩系河原石を主体とし、側壁最下段の石材とずれをもたずに設置されていた。玄室と羨道それぞれの側壁は接点をもつが、組み合わせで積み上げられた部分は認められなかった。このことは双方が別の時点で構築された可能性を示唆している。

また、礎床下には、側壁根石と同一面に扁平な石材を用いた基礎石が敷設されていた。基礎石は玄室内の西側に偏ってみられ、中央より奥壁側に多く配置されていた。この傾向は他の古墳にも見受けられた。

裏込めには簡易な版築が施され、側壁石材を1～2段積みあげる毎にシルトを基本とした土壌によって固定した状況がうかがえた。特に羨道部は砂利混じりの土壌を用いて裏込めしており、非常に固く叩き締められていた。羨道部のみを砂利混じりの土壌で裏込めする方法は、第8および11号墳と共通である。



第188図 第5号墳石室根石

石室規模は攪乱のため全長・玄室長が不明であるが、玄室最大幅113cm、前幅85cm、羨道長152cm、同幅59cmであった。主軸方位はN-10°-Eを指す。石室構築面の掘り込みの規模は、全長694cm以上、最大幅254cm、最深部の深さ28cmであった。

出土遺物はすべて外部施設にともなうもので、出土位置における覆土の観察から、基本的には埋葬時の供献土器と考えられるが、古墳の造営から墓前祭に至るまで、契機は確認できなかった。

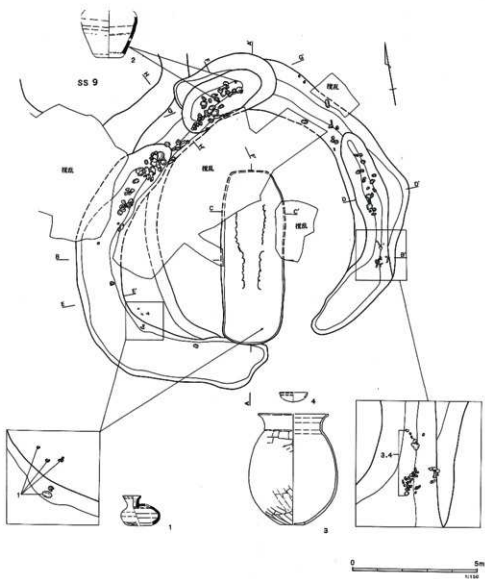
1は須恵器平瓶である。破片1個が前底部最先端から出土した他は、墳丘と周溝間にみられる平場に集中していたもので、集中地点が原位置の近似位置を示すと思われた。底部方向から放射線状の割れ口がみられ、故意に破砕された可能性が高い。

直径に比して高さが低く、扁平

な形状を呈する。頸部は垂直に立ち上がり、口縁部が強く外反する。口縁部下には弱い稜が3条認められ、疑似的な有段を指向したものと思われる。底部には手持ちヘラケズリが施される。焼成は良好で、表面は灰色、器壁内部は薄い灰紫色を呈し、硬く焼きしめる。胎土には石英、黒雲母、白色細粒砂、石英質の小礫を含む。末野産の須恵器にみられる特徴である。法量は、口径5.8cm、底径7.4cm、最大径12.4cm、頸基部径3.8cm、器高9.4cm、肩部高6.8cmである。

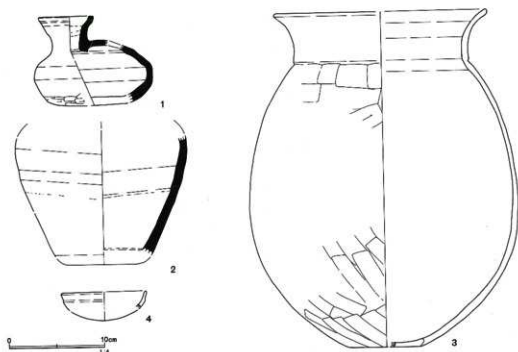
2は須恵器壺片である。溝中土坑に流れ込んだものと思われ、土坑底面から20cmほど上部の石積石材と同レベルで出土した。破片は2片で接点はないが、胎土および調整・形態から同一個体と考えられる。底部から一度のロクロビキで成形されている。焼成は良好で灰白色を呈する。胎土には石英、白・黒色細粒砂、7mm以下の石英質小礫を含む。底部径は約8cmと推定される。器壁は非常に厚く、底部と頸部で9mm、体部で6mmである。

3は土師器甕である。4の杯片と共に東側周溝内で出土した。すべて細片の状態で、周溝底面か



第189図 第5号墳遺物出土状態

ら15cmほどのレベルに散乱し、流れ込んだ可能性もあるが、故意に破砕された後周溝内に投棄されたものと捉えられる。出土した破片は1個体分であったが、激しい風化によって接合できたのは口縁部および頸部と胴部の一部のみである。口縁部は大きく外反し、細かいハケ目状の横ナデが施される。胴部は下半に最大径をもつと想定され、上半には横ヘラケズリ、下半には斜めおよび縦ヘラケズリが施される。ヘラケズリのため、頸部外面には明瞭な段が生じている。頸部内面はヘラナデが施されるが、胴部は風化が著しく調整の状態は不明である。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。胎土には石英、黒雲母、角閃石、石英質小礫、2mm以下の酸化鉄粒、細粒砂を含む。法量は口径22.3cm、底径7.2cm、器高約35cmである。



第190図 第5号墳出土遺物

4は土師器杯片である。3の破片に混在して出土した。体部と口縁部の境に弱い稜をもつ。調整は、激しい風化のため判別できない。焼成は良好で、橙色を呈する。胎土には石英、片岩粒、細粒砂を含む。法量は口径約9cm、器高約2.9cmである。

そのほか、玄室残存部では最奥部の磔床面上から成人および幼児各1個体の人骨が出土した。

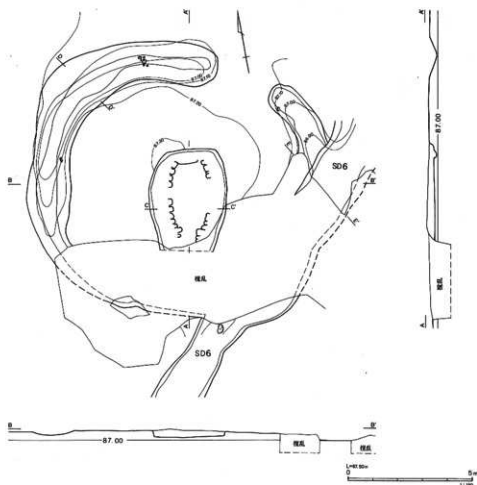
第6号墳（第191～195図）

J-13・14・15、K-13・14・15グリッドに位置する。旧自然堤防の頂部に立地し、標高は87.4mであった。北東3.6mに第3号墳、東に第7号墳、南西約3mに第5号墳が隣接していた。第7号墳とは重複関係にあったものと思われるが、重複部分は、古墳墳丘を避けながら南西に走る近世段階の第6号溝によって破壊されており、先後関係は捉えられなかった。

外部施設では、周溝のみが検出された。周溝の平面形態は東西にやや長い楕円形であった。重複関係にある第6号溝の東側に、当古墳の周溝の形状に由来すると思われる不自然な影りがあるが、上部には攪乱土が堆積していたため、土壌からの判断は不可能であった。形状からみれば、第6号溝によって切断された第6号墳南東側の周溝が攪乱中に遺存したものであると考えられる。また、古墳中央を起点にして、N-39°-Eの方位には陸橋部が存在していた。

周溝の断面形態は、北から西部にかけての一部に緩やかなV字状を呈する部分がある以外、不整形を基本としていた。底面のレベルは他の古墳に比べ変化が少ないが一定ではなかった。

周溝内に石材の出土はほとんど認められず、石積・葺石等の存在は疑われる。



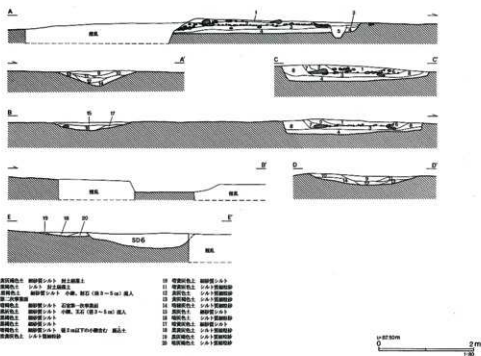
第191図 第6号墳

周溝の規模は、計測可能な東西内径の最大値で10.06m、幅は北西部で最大2.24m、南西部で最小0.98mを測り、深さは全般的に浅く北側で最深32cmであった。

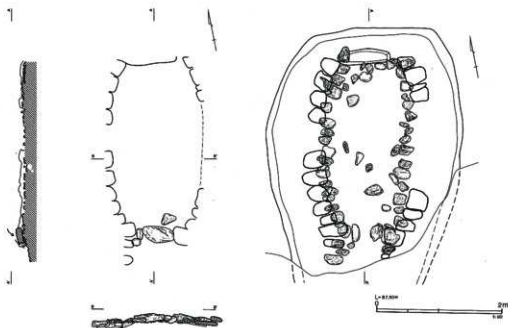
主体部には、胴張りのある横穴式石室が検出された。堅穴の掘り込みをもって石室構築面を形成していた。墳丘の削平にともない石室の大半が失われていたが、旧地表面下の堅穴内に入る玄室側壁最下段と根石、および棺床面については確認することができた。羨道部・羨門・前庭部は完全に失われており、形態・規模とも明らかにできなかった。また、玄室右側壁中央部にも部分的な攪乱が認められた。遺存部分の玄室主軸方位はN-39°-Eであった。

玄室側壁は、長さ約30cm大で長楕円形を呈する砂岩系河原石、点紋石墨片岩・緑泥石片岩を布積みしたもので、整った胴張りの平面形態を呈していた。構築石材の約3分の2が結晶片岩であった。奥壁についても結晶片岩の板石を用いたものと思われるが、すでに抜き取られ、板石の据え付け孔が検出された。棺床面には径2cm程度の細かい玉石が敷設され、礎床を構成していた。

玄門には長軸長40cm以上の大形の河原石を用い、内部空間に20cm前後突出させることにより平

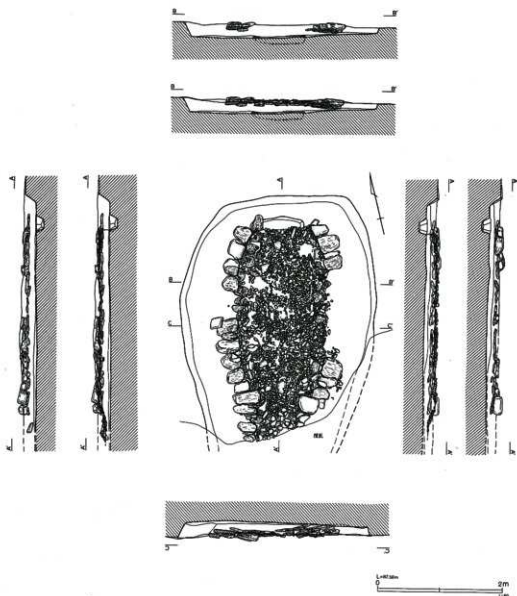


第192図 第6号墳土層図



第193図 第6号墳石室閉塞施設および根石

面プランにおいて門柱石状の空間構成をなし、羨道と玄室の区画を明確にしていた。羨道は玄室側の基部のみが遺存していた。床面には玄室内より大きい径約10cm 前後の玉石が敷き詰められていた。なお、羨道幅は60~70cm 程度と推定される。閉塞施設は玄門部で検出され、長さ70cm、厚さ

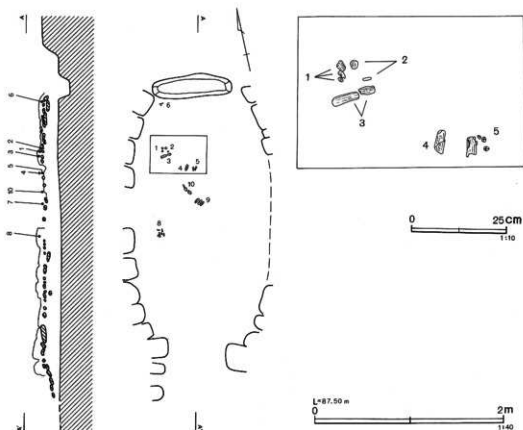


第194図 第6号墳石室

15cmほどの点紋石墨片岩の板石を立てたものと考えられる。図の矢印は倒壊方向を示す。

石室根石の設置に際しては、初めに堅穴全面に小礫を多く混入した細砂質シルト（4層）を敷き、さらに玄室の内部空間相当部分に玉石と3～5cm大の割石を混入した細砂質シルト（3層）を敷いて整地面を形成していた。根石はこの上に直線を基本に配置されるが、胴張りをもつ側壁下部についても直線的な構成がとられていた。玄室側壁幅が最大となる位置における左右側壁間の根石幅は、約104cmである。また、奥壁と玄門付近には基礎石が集中しており、玄室の力学構造上、この部分の強度が重視されていたことがわかる。根石は大半が結晶片岩であった。

また、根石は側壁最下段の石材より最大20cm内側にずれて配置されていた。側壁石材に比して



第195図 第6号墳人骨出土状態

相対的に小形の根石を用いること、および根石・側壁間の「ずれ」によって、側壁石材は外側に向けた傾斜を与えられていた。これは、持ち送りによって積み上げられる玄室側壁部分の崩壊を防ぐための工法であると考えられる。羨道部側壁には根石との「ずれ」は認められず、石材の大きさについても差がみられなかった。

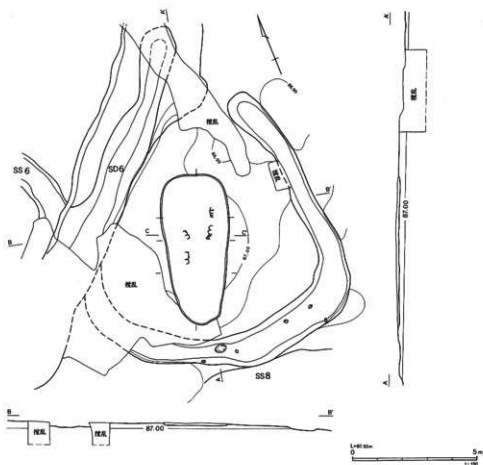
石室規模は、玄室長263cm、奥幅93cm、奥壁から約130cm 前方における最大幅146cm、前幅60cmであった。

なお、構築面の堅穴は石室の形状に添った形態を呈し、玄室の胴張り部分に最大幅をもつものと思われる。立ち上がりは垂直に近く、断面は逆台形で整った掘削が行なわれていた。最大幅320cm、深さ20cmであった。

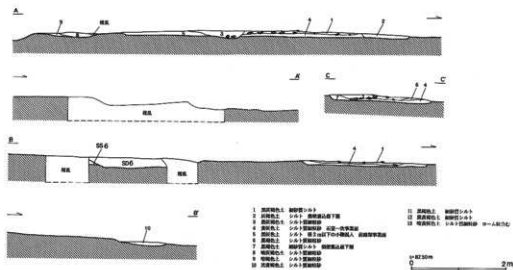
出土遺物は検出されなかったが、玄室内から成人および幼児各1個体の人骨が出土した。脱灰が進み、いずれも細片の状態で、棺床面を構成する玉石の間、あるいは玉石に付着して検出された。比較的良好な状態で出土したものには臼歯がある。

第7号墳 (第196～198図)

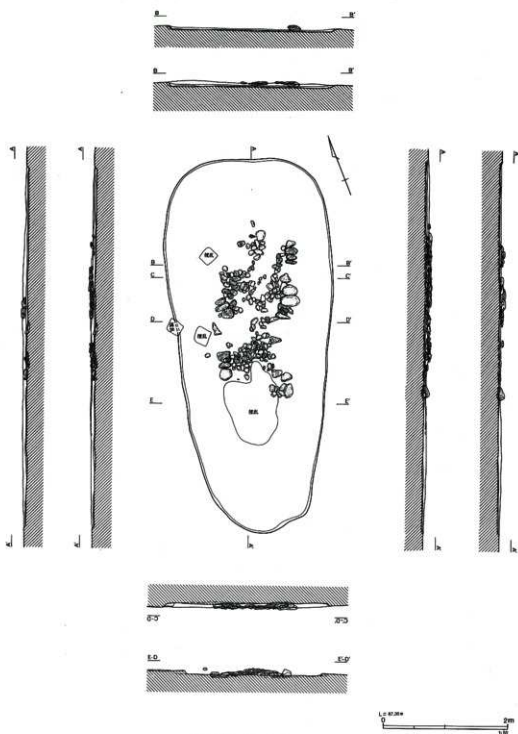
J-15、K-14・15・16、L-15グリッドに位置する。旧自然堤防頂部から南斜面にかけて立地



第196図 第7号墳



第197図 第7号墳土層図



第198図 第7号墳石室

し、標高は87.0mであった。第6号墳および第8号墳に重複関係が認められた。第6号墳との先後関係は、第6号溝による攪乱で判断できないが、第8号墳との重複関係は明確で第8号墳が当古墳に先行したものと考えられる。また、北に第3号墳、北東に第4号墳、東に第10号墳が隣接しており、周溝のいびつさからみて第3・4・6、および8・10号墳によって囲まれたわずかな余地に、これらの古墳を避けるようにして造営されたものと考えられる。

外部施設は、墳丘が削平されており周溝のみが検出された。

周溝の平面形態は東・南・西で直線的な三角形形状を呈していた。これは、隣接する第6・8・10号墳に規制されたためであろう。北側には陸橋部が位置し、古墳の中央を起点とした方位でN-32°-Eであった。断面形態は不整形で、底面のレベルは一定でなかった。

規模は周溝内径で最大8.38m、最小8.08m、最大幅は南東部で1.62m、最小幅は主体部の南側で0.94mであった。墳丘の削平にともない周溝上部も失われており、検出時の深さは最大の東側でも16cmに過ぎなかった。

周溝内に出土遺物は認められず、第8号墳側の底面付近に河原石5個が検出されたのみである。石積・葦石等の存在を推定させる根拠は他に認められないが、周溝埋没過程の初期に崩落したと推察すると、低い石積・外護列石等の形で存在したものと思われる。

主体部は、小形で胴張りのある横穴式石室が検出された。地山に堅穴を掘り込み石室構築面を形成していた。主軸方位はN-22°-Eであった。墳丘の削平にともない、羨道と玄室の大半が破壊されており、形態を把握できたのは右側側壁・礫床・根石の一部に限られた。

石室側壁は、長さ20~30cmの扁平な砂岩系河原石と、点紋石黒片岩・石英石片岩などの結晶片岩による板状石材を布積みする構造であった。特に、羨道部には結晶片岩が多用されていた。玄室棺床面および羨道部床面には、径10cm前後の玉石が敷かれ礫床としていた。前庭部は東側に部分的に遺存していた。

根石は大半が結晶片岩であり、前庭部の石材は細粒砂岩が多く用いられていた。玄室では、根石と側壁最下段の石材に最大6cm程度の「ずれ」が認められたが、羨道部にはみられなかった。

石室規模は、玄室最大幅114cm前後、前幅61cm、羨道幅72cm前後が推定できる。

石室構築面の堅穴は、玄室部分が隅丸長方形、前庭部方向が楕円形平面であった。断面は逆台形を呈し、壁面はやや急に立ち上がっていた。規模は全長592cm、最大幅272cm、深さ8cmで、最大幅は玄室最大幅の位置とほぼ一致した。

第8号墳（第199~207図）

L-14・15・16、M-14・15・16グリッドに位置する。旧自然堤防の南東斜面に立地し、標高は86.9mであった。北に接する第7号墳とは重複関係にあり、第8号墳が先行する。また、北東4.1mには第10号墳が、南西4.2mには第18号墳が隣接していた。第8号墳は初め一部が調査区域にかかって検出されたため、後に調査区の拡張を行なった。

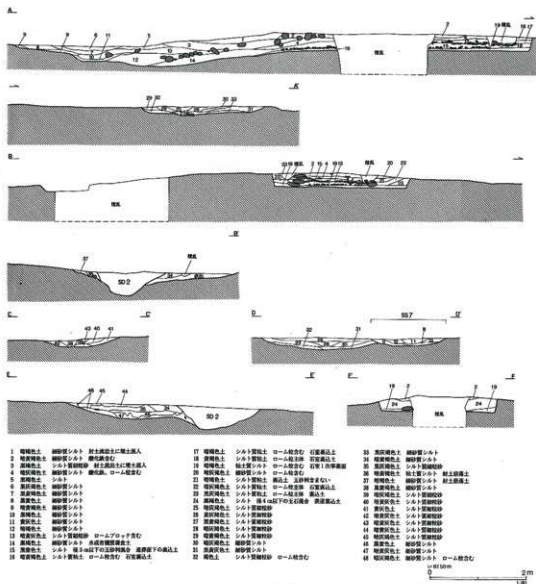
外部施設のうち、墳丘の盛土部分は完全に削平され、周溝および周溝に区画された墳丘下部に相当する地ぶくれ部分が検出された。



第199回 第8号墳

遺存した地ぶくれ部分は地山を削り出し成形したもので、見かけ上周溝による区画範囲内全域が低い墳丘をなすようにみえた。地ぶくれ部分の平面形はほぼ正円形を呈し、直径は周溝内径に準じ最大11.12mを測った。検出時の地ぶくれ部分の高さは、北側周溝上端との比高差約15cm、南側周溝上端との比高差約55cmであった。主体部である横穴式石室は、この比高差が最大となる旧自然堤防の南斜面を利用して構築されていた。

周溝の平面形態は不整な円形で、南から東側で幅が広く、西側で狭くなるのを特徴とする。南西に陸橋部をもち、古墳中央部を起点とした方位はS-42°-Wであった。周溝幅が最大となる東側には第2号溝が南北に走っていたが、この第2号溝が古墳の墳丘を避け周溝内を掘りつないでいる

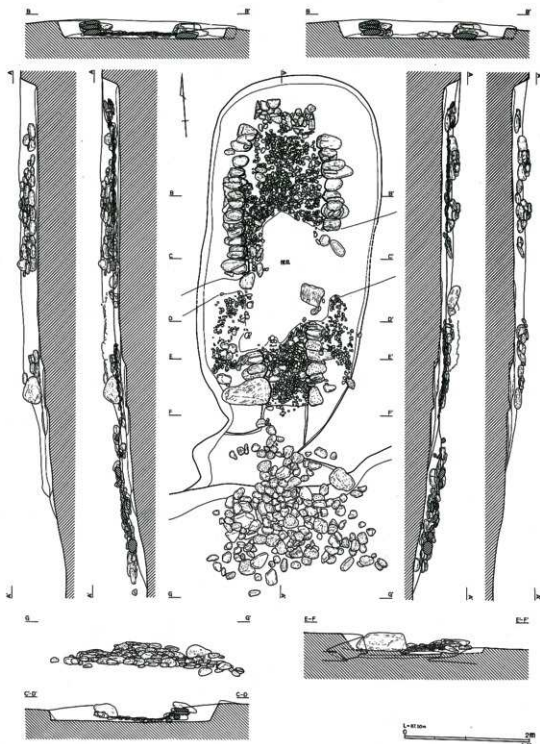


第200図 第8号土層図

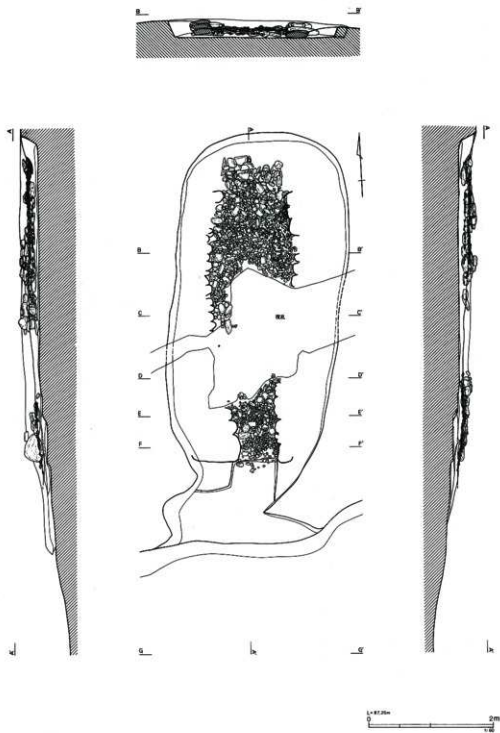
ことからみて、周溝の最深部は第2号溝の位置にあったと考えられる。

周溝の断面形態は不整な弧状を基本とし、立ち上がりは緩やかであった。周溝底面のレベルは一定せず、南側から東側にかけて深くなっていた。石室構築にともなう盛土の確保に関係する現象であろう。石室前庭部の前面や東には溝中土坑が検出され、最深部から土師器甕1個体分と同杯片が破砕された状態で出土した。土坑の覆土は自然堆積であり、第3・5号墳の土坑に類似の状態であった。埋葬を示す積極的な状況はなく、土器を用いる行為に関わる施設であったと考えられる。

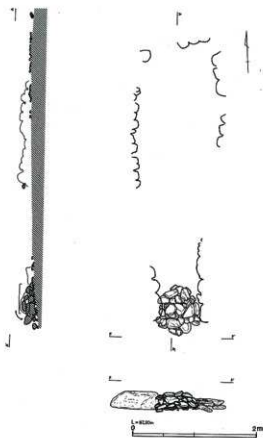
周溝規模は、内径で東西方向最大11.12m、南北方向最小9.62m、幅は東側で最大5.32m、西側で最小1.38m、深さは北側の最深部で24cm、溝中土坑で25cmを測った。



第201图 第8号墳石室(1)先葬面



第202図 第8号墳石室(2)追葬面



第203図 第8号墳石室閉塞施設

円形をなす砂岩系河原石と、点紋石墨片岩・石英石片岩・緑泥石片岩等の板状石材をほぼ同率で用いたもので、布積みによって構築されていた。間隙には棒状の砂岩系河原石・結晶片岩が充填され、裏込めは石材1段ごとに簡易な版築をもって行なわれていた。奥壁はすでに失われていたが、抜き取りによる攪乱層とその外側に存在する奥壁基礎となった扁平な石材の在り方からみて、板石を用いていたことが窺われた。

第8号墳の玄室には、径3～8cmほどの玉石を用いた礫床による棺床面が、黒紫色の15層を挟んで二重に敷設されていた。追葬に際して礫床面を敷き直したものと考えられる。二重の棺床面は玄室に限られ、羨道は先葬における礫床面を追葬時にも利用したものと推定される。

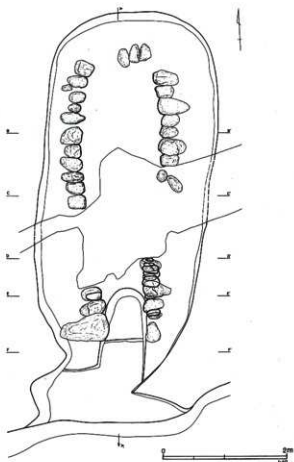
先葬面は、やや厚みのある3～5cm大の玉石を用いて形成されていた。棺床面に遺物は検出できなかった。一方、追葬面は径5cm以上の玉石が中心で、先葬面に比べやや大きめの石材が利用されていた。なお、追葬面の玄室中央部右側側壁付近には細かい玉石が露出しているが、これは攪乱により礫床が失われたためで、露出した玉石は先葬面上に敷かれた追葬面の整地層（15層）に含まれるものである。追葬面では玄室奥壁近くで金銅製耳環2個一対が出土した。遺体に装着されていたものが、遺体の腐朽にともない礫床面に落ち込んだものであろう。

周溝内に崩落した石材はみられなかった。東側部分には少量の石材が散乱していたが、第8号墳にともなうものではなく、地盤の砂礫層から遊離したものと思われる。

主体部は、胴張りのある横穴式石室が検出された。地山に掘り込んだ堅穴をもって、石室構築面を形成している。主軸方位はN-32°-Eであった。

墳丘の削平にともない石室上部の大半が失われており、最大で4段目、高さ30cm前後が遺存していた。また、羨道から玄室前半部分に入る工場基礎による攪乱は、地表下2mに達していた。

玄室の平面形態は緩やかな胴張りを呈し、最大幅はやや奥壁側へ偏るものと推定された。側壁は長さ30～50cmの扁平で楕



第204図 第8号墳石室根石

羨道は、短く幅の狭いもので、玄室と同種の石材による布積みで構築されていた。床面には径3～8cmほどの玉石が敷き詰められていた。玄室の先葬面に準ずるものであった。羨道部には径1～4cmの玉砂利を含むシルト層による裏込めがなされていた(24層)が、版築は認められなかった。玉砂利を含む裏込め層は玄室にはみとめられず、玄室と羨道の構築工程や構築法の相違を想定させる。

羨門は東側石材が抜き取られた可能性があるが、西側には長さ約80cmの石材が遺存していた。羨門の前方には前庭部が敷設されるが、径20～40cmの不整な砂岩系河原石が用いられていた。

前庭部は平面形が台形を呈し、周溝底面までのびていた。上のような構築法によって、石室は半地下式となり、墳丘の高

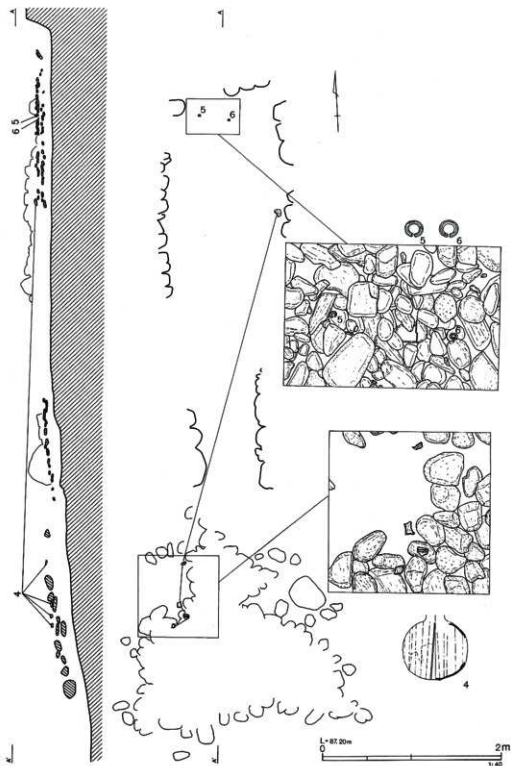
さを抑えつつも、古墳が大きく見え、石室内部の高さが確保し易いという利点をもつと推察される。

閉塞施設は、羨門部に認められた。やや扁平で長さ30cm前後の砂岩系河原石を用い、2～3列をもって積みあげたものと考えられる。図中の矢印は倒壊の方向を示している。

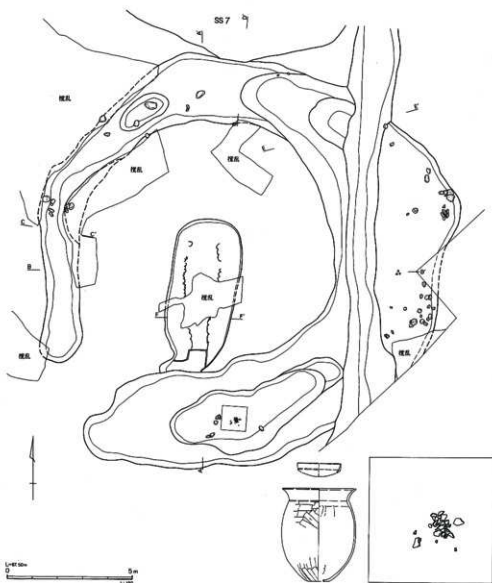
根石は、砂岩系に比べ片岩系石材がやや優位であった。また、上部に積まれる側壁石材に比べて大きさに遜色はなかった。根石と側壁最下段に「ずれ」はみられなかった。なお、第8号墳における根石の配置については、玄室最大幅以前の直線の配置とそれより奥壁側の直線の配置の2直線を結合し、胴張りの基準線を造りだしている可能性がある。

石室規模は、全長450cm、玄室長260cm前後、先葬面玄室奥幅94cm、追葬面同幅90cm、先葬面玄室最大幅124cm、追葬面同幅129cm、羨道長190cm前後、同幅66cmであった。

石室構築面をなす竪穴は、初め楕円形平面であったと考えられ、前庭部の敷設にともない周溝と掘りつないだ可能性が高い。羨道中央部で一段下がり、さらに羨門付近で再び段差をともないレベルが低化していた。断面は逆台形を呈し、立ち上がりはきわめて急で、部分的には垂直に近くなっ



第205図 第8号填遺物出土状態(1)

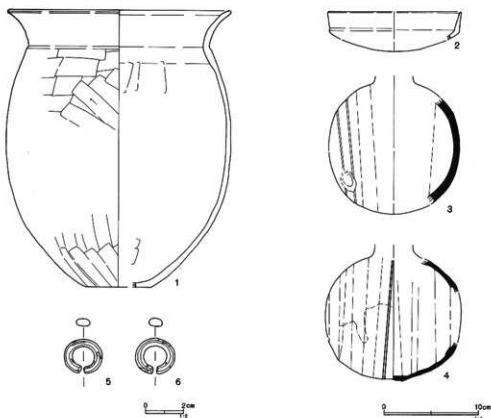


第206図 第8号墳遺物出土状態(2)

ていた。最大幅は玄門付近に相当すると思われるが、擾乱のため確認できなかった。規模は全長608cm、玄門付近における最大幅308cm、深さ28cmであった。

出土遺物は、玄室内、前庭部、周溝からそれぞれ検出された。

1は土師器杯片である。2と共に石室前庭部脇の溝中土坑底面付近、12層内から出土した。底面からやや浮いた状態で、追葬・墓前祭にともなう供献品の可能性が考えられた。風化が激しく、調整等は不明瞭であるが、底部に手持ちヘラケズリが施されている。焼成は良好で橙色を呈する。胎土には石英、雲母、細粒砂を含むが、粒度は均一で礫を含まない。残存率は10%、法量は推定で口径14.4cm、稜径14.2cm、器高3.7cmである。



第207図 第8号墳出土遺物

2は土師器甕である。1と共に前庭部脇の溝中土坑底面付近の12層内から出土した。面的に細片が散乱した状態で検出された。故意に破砕して、土坑内に投棄した可能性があるが、底面から浮いた状態で検出されており、追葬・墓前祭にともなう供献品と思われる。調整は外面胴部上半に横・斜めヘラケズリ、胴部中央に縦ヘラケズリ、胴部下半に斜めヘラケズリ、内面に横方向のヘラナデ、底部にヘラケズリが施される。焼成は良好で、にぶい黄橙色を呈する。胎土は石英、黒雲母、角閃石、3mm以下の酸化鉄粒、細粒砂を含む。破片総量は1個体分であったが、風化が激しく胴部片の多くは接合しなかった。量法は口径22.8cm、頸部径19.7cm、推定高約30cm、底径約7.6cmを測る。

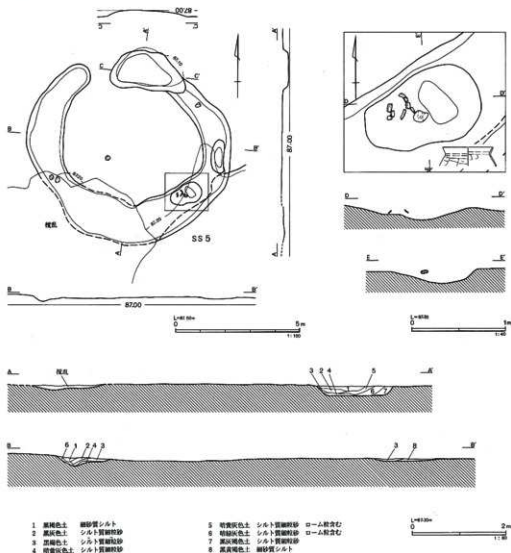
3・4は、いわゆる須恵器フラスコ形細頸甕である。3は胴部下半と推定され、東側周溝内、第2号溝覆土中から検出された。外面には自然釉がかかる。径15mm程度の穿孔がみられるが、焼成後のものである。焼成は良好で、胎土は灰黄色に焼きしめるが、釉は透明から暗灰黄色に発色し、やや溶け残る部分がみられる。胎土には石英、雲母、長石を含む。

4は前庭部出土の4片が接合したもので、玄室内出土の1片は接点のない同一個体片である。胴部下半とみられ、上半・頸部を欠く。胴部の張りが大きく、やや扁平な形状を呈し、内外面に自然釉が附着する。ロクロ成形後、疑似口縁を円形粘土板による蓋で塞ぎ、底部にあたる位置から蓋部にかけての胴部半分を回転ヘラケズリによって調整している。焼成は良好で灰黄色を呈し、堅固に焼きしめるが、外面下方に残る自然釉は黒灰色に溶け残っており、焼成時に十分な温度上昇が得られ

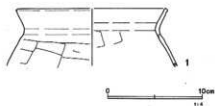
なかったものと思われる。胎土は石英、長石、細粒砂を含み、非常に緻密である。法量は推定で、胴部径14.0cm、胴部高13.2cmである。

5・6は一对をなす金銅製耳環である。ともに追葬時の棺床面直上で、原位置に近い状態を保って検出された。双方の間隔は33cmで、切れ目は遺体想定位置の足の方向（南）を向いていた。検出時は全面緑青に覆われていたが、クリーニングの結果、5で9割以上、6で8割以上の鍍金が遺されていることがわかった。5は、外径20.8～18.3mm、内径11.8～10.4mm、厚さ7.1～4.0mm、重さ8.31gで、切れ目は約2mm未満である。6は、外径20.7～18.6mm、内径12.6～10.7mm、厚さ7.1～4.2mm、重さ9.01gで、切れ目は約2mm未満である。

第9号墳（第208～209図）



第208図 第9号墳



第209図 第9号墳出土遺物

K-12・13グリッドに位置する古墳跡である。旧自然堤防から後背湿地に至る北側斜面に立地し、標高は87.2mであった。南東に隣接する第5号墳とは周溝において重複関係にあった。覆土の状況から、第9号墳は第5号墳に覆れるものと考えられる。

墳丘は完全に削平され周溝のみが検出されたが、上端部が削平によって失われていた。また南西部は工場建築物の基礎工事による擾乱を受け、底面が遺存していたにとどまる。

周溝の平面形態はほぼ正円形を呈し、古墳中央部を起点としてN-20°-Wで陸橋部を形成していた。断面形態は一部で逆台形となる他は一般に不整形で、立ち上がりは緩かった。底面のレベルは一定せず、北側で深く、土坑状となっていた。第5号墳との重複部付近には溝中土坑がみられ、内部から土師器甕が検出された。土坑は自然堆積によって埋没しており、特殊な状況は認められなかった。

溝内からはわずかに河原石が出土したが、石積・葺石等の存在を想定するには不十分であった。

周溝規模は、内径で最大5.78m、最小4.54m、最大幅1.72m、最小幅0.92m、北側の最深部の深さ約20cmを測り、形態が明確なものでは群中最小の古墳であった。なお、土師器甕を出土した溝中土坑は長軸長2.54m、短軸長1.60m、最深部の深さ31cmを測った。

出土遺物は周溝内から検出された。

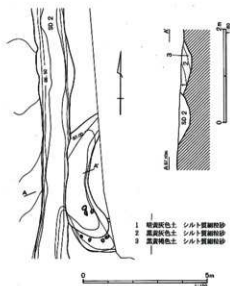
1は土師器甕である。主体部相当位置南東の溝中土坑から出土した。口縁部を下に向け、逆位に設置されたものとみられ、墳丘および周溝上部の削平とともに胴部下半が失われたものであろう。故意に破砕した形跡は認められない。胴部外面に横ヘラケズリが、内面には横・斜めヘラナダが施される。焼成は良好で、にぶい橙色を呈する。胎土には石英、角閃石、酸化鉄粒、細粒砂および粗粒砂を含む。口径16.1cm、頸部径14.3cmである。激しく風化している。残存率は55%である。

第10号墳 (第210～211回)

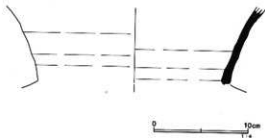
K-16グリッド調査区限界に溝の一部がかかったもので、形態、位置などから古墳跡と判断した。旧自然堤防の南斜面に立地し、標高は87.0mであった。北に第4号墳、西に第7号墳、南西に第8号墳が隣接していた。第7号墳との距離は約1.2m程度であった。西側に第2号溝が走り、周溝の西側立ち上がり上端部付近が破壊されていた。

検出された周溝は非常に浅く、断面形態は不整な弧状で、幅・底面のレベルは一定しなかった。周溝内には径20cm以下の河原石が散在するが、石積等の存在を示すものとは考え難い。周溝の規模は、第9・11号墳と同程度であると予想される。最深部の深さは約24cmであった。なお、墳丘・主体部等は、調査区外にあたるため明らかにできなかった。

出土遺物は周溝内から検出された。1は須恵器甕の頸部破片である。外面には平行タタキ後、スリケシを施すが、激しい風化による剝離のため単位は捉えられなかった。焼成は不良で、もろさが



第210図 第10号墳



第211図 第10号墳出土遺物

目立つ。暗灰黄色を呈する。胎土には石英、金雲母、細粒砂、径3mm以下の小礫を含む。

第11号墳（第212～216図）

G-14・15グリッドに位置する。旧自然堤防の北側斜面に立地し、標高は87.0mであった。旧自然堤防頂部の古墳列に対して周辺の・衛星的な分布状況であった。東約1mに群中最大規模の第12号墳が、南東約3mに第13号墳が隣接していた。

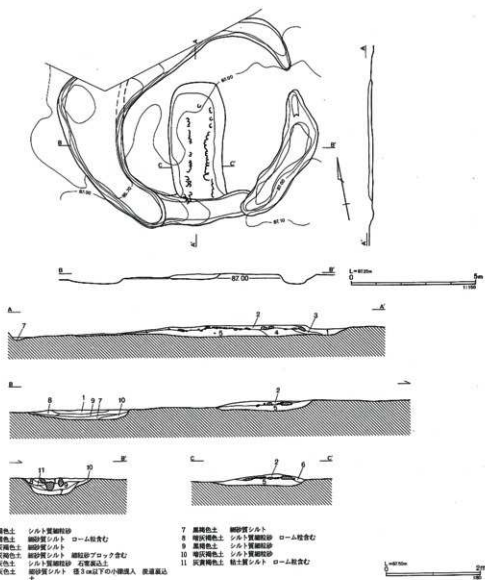
外部施設では、墳丘は削平され周溝のみが検出された。しかし、周溝についても、表土層が40cm程度であったため、近世段階の耕作によって遺構面上層が破壊され、北東部分では底面付近から立ち上がり下部にかけて遺存したにすぎない。

周溝の平面形態は東西につぶれた不整な円形を呈し、古墳中央部を起点としてN-68°-Eの方位には陸橋部が設けられていた。断面形態は不整形で、立ち上がりはやや急であった。周溝幅・底面のレベルとも不規則で、北西部は擾乱のためか周溝内側の地山部分そのものが失われていた。

周溝の規模は、内径で最大7.10m、最小5.96m、北西部で最大幅2.77m、北東部で最小幅1.02mであった。主体部の東西両側で深くなり、東側で最深部38cm、西側では18cmであった。これは主体部の構築にともなう土採りに起因すると考えられる。また、石室前方部分の周溝は、前庭部設置にともない埋め戻されており、元来の深さも約10cm前後と非常に浅いものであった。

周溝内の北西部および南東部では、径10～30cmの砂岩系河原石が複数検出された。墳裾に石積あるいは列石等が存在したと思われる。

主体部には胴張りのある横穴式石室が検出された。地山に掘り込んだ堅穴によって、石室の構築面を形成していた。石室は堅穴の上端付近まで削平されていたため、上部構造と奥半部が失われ、

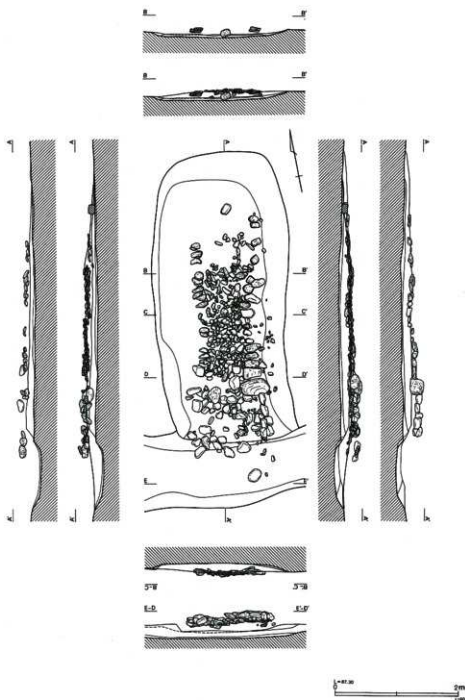


第212図 第11号墳

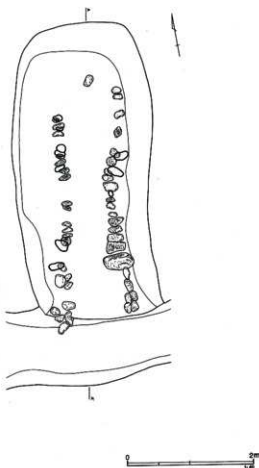
棺床面付近が遺存したものである。主軸方位は $N-10^{\circ}-E$ であった。

玄室は緩やかな扇張りを呈し、中央に最大幅をもつ形態と思われ、点紋石墨片岩、石英石片岩などの結晶片岩および砂岩系の河原石をほぼ同率で用いた布積みによって構築されていた。検出された側壁石材はほとんどが根石で、長さ30cm前後の転石が主体であった。床面には長さ15cm以下の扁平で細長い玉石が敷設され、礎床をなしていた。また、奥壁には結晶片岩の板石を使用したと思われるが、完全に破壊されていたため確認できなかった。

明確な玄門の構造は検出できなかったが、玄室および羨道側壁の配列からみて、やや大きめの石材が平面プランの上で、門柱石状に配置されていたものと推定される。



第213图 第11号填石室

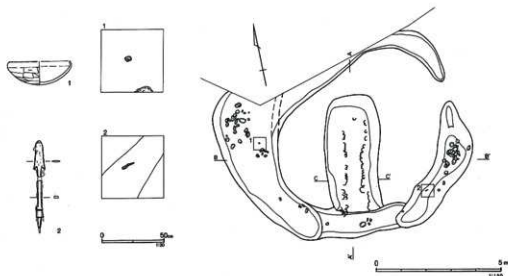


第214図 第11号墳石室模石

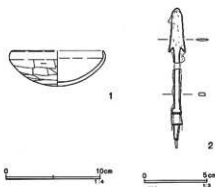
羨道は短く狭いものであった。側壁は玄室同様の石材および工法によって構築されており、床面には径10cm以下の玉石が敷き詰められていた。裏込めは、細砂質シルトに小礫を混入した土壌（6層）で行なわれ、第5・8号墳と共通の工法であった。裏込め層の重なりから、玄室裏込めの後に込められたものであると思われる。なお、玄室・羨道部とも、裏込めに版築の形跡はみられなかった。

羨門は右側側壁に遺存するだけであったが、長さ50cmの結晶片岩河原石が用いられていた。閉塞は羨門部と羨道を用いて行なったもので、径20cm程度の砂岩系河原石数個が散乱した状態で遺存していた。

前庭部は径25cm 前後の砂岩系河原石を敷設して形成されて



第215図 第11号墳遺物出土状態



第216図 第11号墳出土遺物

いた。東側では緑石状に直線的に配置した様子がうかがえ、石積構造をもつ形態が想定された。また、前底部は周溝内にのびており、周溝の一部を埋め戻して空間が確保されていた。

根石と側壁最下段の石材には玄室で5cm程度の「ずれ」があるが、羨道にはみられなかった。根石には点紋石墨片岩・石英石片岩などの結晶片岩が多く用いられ、扁平で長さ20cmに満たないものが多かった。

石室規模は、全長約290cm、玄室長182cm、

同最大幅78cm、同前幅51cm、羨道長108cm、同幅56cmであった。このうち、全長と玄室長、玄室最大幅は推定値である。

石室構築面の竪穴は隅九長方形を呈し、最大幅は玄室最大幅想定部分に位置していた。断面は逆台形を呈するが、立ち上がりはやや緩かった。規模は、全長464cm、最大幅220cm、深さ16cmであった。

遺物はすべて周溝内から出土した。

1は土師器杯である。西側周溝覆土の9層内から出土した。口唇部にヨコナデ、底部に手持ちヘラケズリが施される。焼成は良好で、橙色を呈する。胎土には石英、黒雲母、細粒砂を含む。残存率は約30%で、口径10.6cm、器高4.2cmである。

2は長頸式鉄剣である。南東側周溝覆土の9層内から2片に分かれて出土した。2片は錆化と変形により接合しないが、同一箇所並列して出土したこと、頸部の幅・厚みが共通することから同一個体と考えられる。全体に細身の両刃丸造りで逆刺をもつ、いわゆる腸快柵葉式である。復元長約108mm、刃部幅12.2mm、刃部長32.8mmを測り、重さは8.80gである。

第12号墳 (第217～220図)

E-17、F-15・16・17・18、G-16・17・18・19、H-16・17・18・19グリッドに位置する古墳跡である。旧自然堤防頂部から南北両側斜面にかけて立地し、標高は87.2mであった。

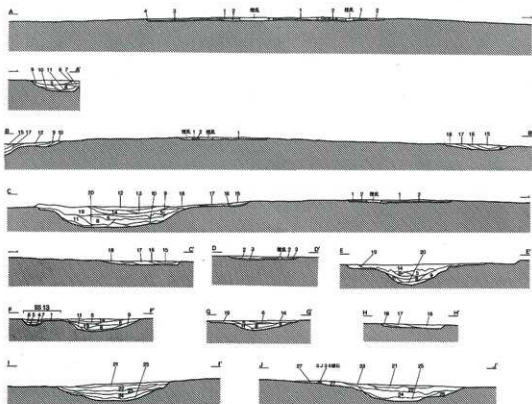
南西の第13号墳・南の第14号墳とは周溝が重複関係にあった。第12号墳は第13号墳に先行するが、第14号墳とは周溝底面にレベル差がなく、共通の覆土で埋没していたことから、時期差を捉えることはできなかった。西1mには第11号墳が隣接し、衛星的な分布を示していた。北西側民家との地区境が西側周溝上で湾曲するのは、墳丘の一部が最近まで残存していたことを示すものと考えられる。

外部施設では、墳丘は削平され周溝のみが検出された。二重の周溝をもち、内側周溝内径で最大19.3m、最小16.1m、最大幅3.43m、最小幅1.20m、外側周溝内径で最大27m以上、最大幅6.40m、最小幅3.76mを測る群中最大規模の古墳であった。墳丘は旧自然堤防頂部の高まりを中心に、南北両側への緩傾斜を利用して構築されており、土量は面積に反して多くなかったものと考えられる。

周溝の平面形態は、外側周溝は東西に、内側周溝は南北にやや長い不整な円形を呈し、内外とも

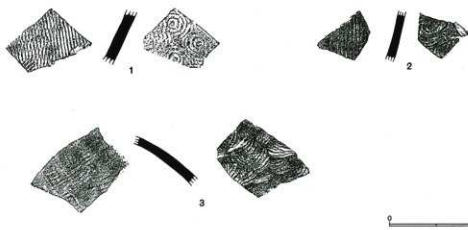


第217图 第12号墳

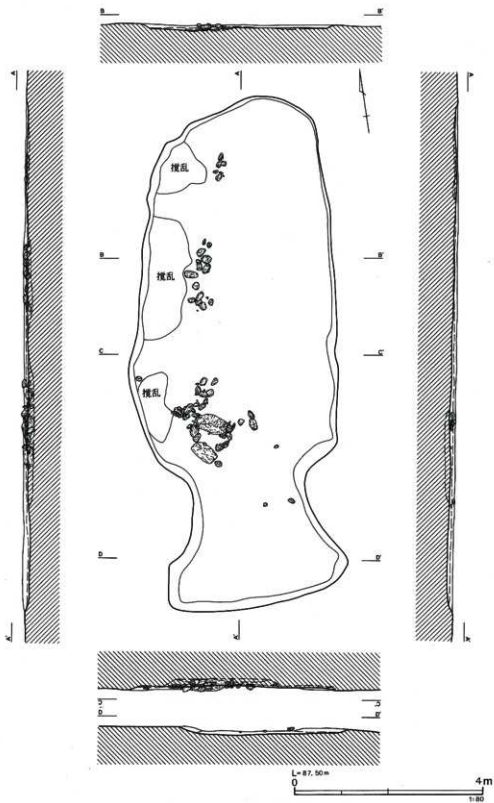


- | | | |
|---------------|----------------|----------------|
| 1 埋土層上 シルト質細砂 | 18 埋土層上 シルト質細砂 | 25 埋土層上 シルト質細砂 |
| 2 埋土層上 シルト質細砂 | 19 埋土層上 シルト質細砂 | 26 埋土層上 シルト質細砂 |
| 3 埋土層上 シルト質細砂 | 20 埋土層上 シルト質細砂 | 27 埋土層上 シルト質細砂 |
| 4 埋土層上 シルト質細砂 | 21 埋土層上 シルト質細砂 | |
| 5 埋土層上 シルト質細砂 | 22 埋土層上 シルト質細砂 | |
| 6 埋土層上 シルト質細砂 | 23 埋土層上 シルト質細砂 | |
| 7 埋土層上 シルト質細砂 | 24 埋土層上 シルト質細砂 | |
| 8 埋土層上 シルト質細砂 | 25 埋土層上 シルト質細砂 | |
| 9 埋土層上 シルト質細砂 | 26 埋土層上 シルト質細砂 | |
| | 27 埋土層上 シルト質細砂 | |

第218図 第12号墳土層図



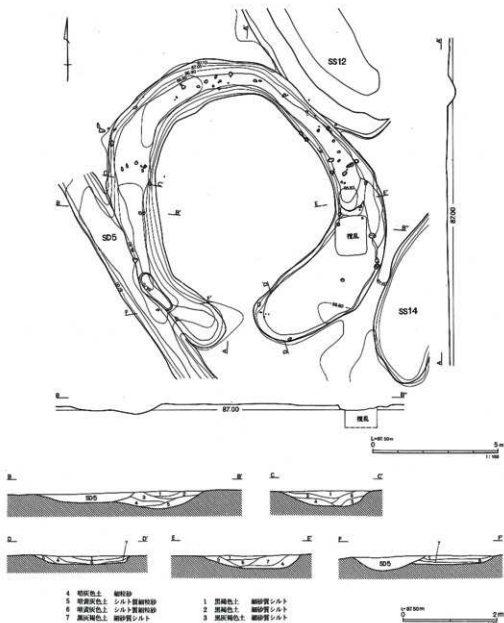
第219図 第12号墳出土遺物



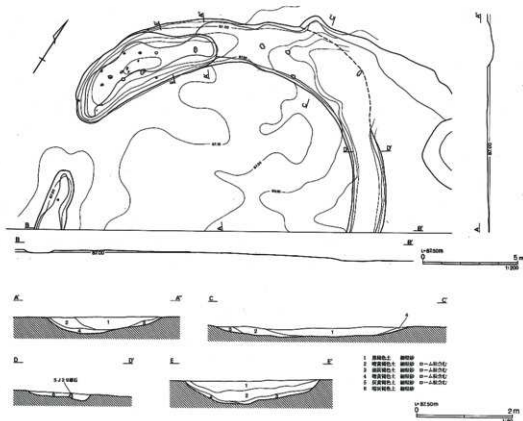
第220図 第12号墳主体部掘り方

に古墳の中央を起点としてS-10°-Wに陸橋部が設置されていた。これは主体部の前庭部相当位置の前方にあたる位置である。また内側周溝西側では侵食のために外側立ち上がりが出ており、外側周溝との境界が不明確になっていた。

断面形態は、内側周溝が不整形であるのに対して、外側周溝は西側にテラス状の平坦面を備えた逆台形をなしていた。底面のレベルは内外ともに一定せず、外側周溝における最深部の深さは90cm、内側周溝における最深部の深さは48cmに達している。外側周溝南東部には、2カ所の窪み



第221図 第13号墳



第222図 第14号墳

と形態の乱れがみられるが、これは周溝掘削中に縄文時代後期の数石住居跡(SJ 30・31)および覆瓦構造をもつ礫層に達したためで、これらを避けて周溝の掘削を中止し、方向等を模索した結果によるものと思われる。周溝内には北西部を中心に河原石が散乱しており、石積・葺石の存在が推定された。

主体部は、遺存していた石室構築面の堅穴および石材から、砂岩系河原石および結晶片岩による横穴式石室であったと推定された。堅穴の形態は、不整な隅丸方形に台形の前庭部相当部位を備え、前庭部相当位置と横穴部相当位置の間にくびれがみられた。前庭部相当部は、横穴部の掘削後に掘り込まれた可能性もある。堅穴の規模は、全長556cm、最大幅220cm、深さ12cmであった。

出土遺物はすべて須恵器甕片であった。1が前庭部相当位置付近で採取された他は、周溝内より出土した。いずれも外面に平行タタキ、内面に同心円あるいは青海波状の当て具痕がみえる。焼成は良好で、1は灰黄色、2は灰色、3は灰白色に焼きしめる。胎土には石英・細粒砂を含む。

第13号墳 (第221図)

G-15・16、H-15・16、I-16グリッドに位置する古墳跡である。旧自然堤防頂部に立地し、標高は87.1mであった。北2.5mに第11号墳、東40cmに第14号墳、南約2mに第3号墳が隣接していた。第12号墳とは周溝に重複関係がみとめられ、第12号墳が先行する。南西側周溝の外側立ち上りには、近世段階の第5号溝によって破壊されていた。

外部施設は、墳丘が削平され周溝のみが検出された。

周溝の平面形態は不整な円形を呈し、第12号墳を避けるように北東部が内側に歪んでいた。陸橋部は古墳中央を起点としてS-3°-Wの方位に設けられていた。

周溝断面形態は不整な逆台形を基本とするが、底面のレベルは一定せず、西から北側にかけてやや深くなる。周溝の規模は、内径で最大8.60m、最小7.04m、最大幅2.84m、最小幅1.10m、最深部の深さ36cmであった。周溝内には径30cm前後の河原石が散在しており、石積・葺石等の存在が推定された。

第14号墳（第222図）

G-18、H-16・17・18、I-16グリッドに位置する古墳跡である。旧自然堤防の南側斜面に立地し、標高は87.0mであった。南半部は調査区外にかかった。第12号墳とは周溝が重複関係にあった。重複部分の周溝は第12号墳外側周溝と同一の覆土で埋没しており、先後関係は捉えられなかった。西40cmに第13号墳が、南西65cmに第4号墳が隣接していた。

墳丘は削平され周溝のみが検出された。周溝の平面形態は不整な円形と考えられ、古墳中央を起点とするS-80°-Wに陸橋部を備えていた。断面形態は不整な弧状であった。底面のレベルは一定せず、西側で深く東側で浅い。これは掘削中、礫層等に達すると作業を中止したため、底面には縄文時代後期の敷石住居跡SJ29の縁石が認められた。周溝内には河原石が散在するが、葺石等の存在を積極的に推定する材料はなかった。周溝規模は、内径で15.00m、最大幅3.02m、最小幅1.32m、最深部の深さ52cmであった。

第15号墳（第223～229図）

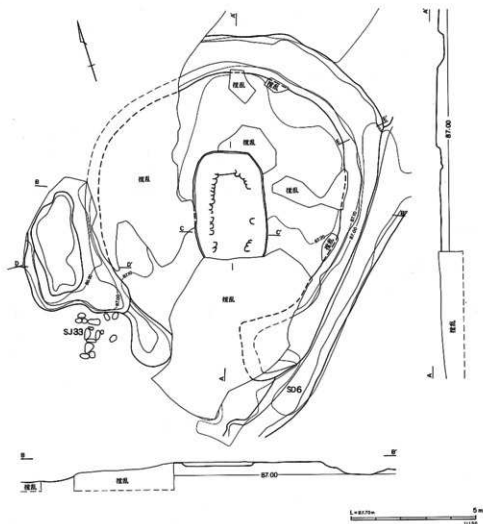
L-12、M-11・12、N-11・12グリッドに位置する。旧自然堤防頂部に立地し、標高は87.2～87.4mであった。北東3.6mに第5号墳、南東1.8mに第17号墳、南西1.8mに第16号墳が隣接していた。東に接する第18号墳とは重複関係にあったものと推定されるが、第6号溝による攪乱のため相互の関係は捉えられなかった。

北西側は工場建築物の基礎および産業廃棄物の投棄坑により攪乱されており、確認された地形は古墳造営時の自然地形に比して、最大40cmほどの水準低下があるものと思われる。

外部施設では、墳丘は削平されており周溝のみが検出された。北西部および南部に広範囲な攪乱を受けるなど、遺存状態はよくなかった。また、南部から東部にかけて、第6号溝により周溝の外側立ち上がりおよび底面東半部が破壊されていた。

周溝の平面形態は整った円形を指向したものとみられるが、南部で歪み不整な円形となっていた。南西部に周溝幅が急激に減少する部分が見られたが、これは縄文後期の敷石住居跡（SJ33）の敷石部分に達し、掘削を中止したことに起因する。周溝は、その後南方へ延びて一端幅の回復をみせるが、古墳中央を起点としてS-28°-Wの方位で陸橋部となっていた。

周溝の断面形態は、緩い立ち上がりをもつやや不整な逆台形を基本とし、底面のレベルは北側では一定するが西側では不規則で、部分的に深さと幅を増していた。西側における周溝規模の増大



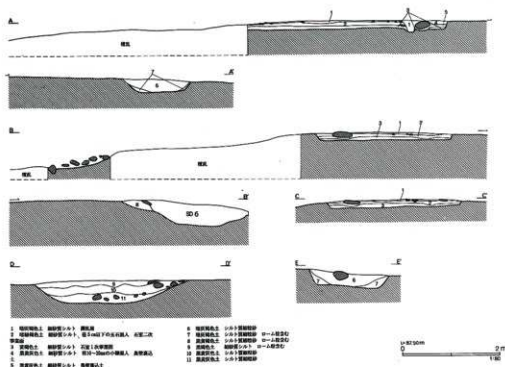
第223図 第15号墳

は、群中の他例からみて主体部両側における土量確保、および SJ 33 による周溝掘削作業の中止・変更の影響によるものと考えられる。

周溝内の堆積土壌は、第 6・8・9・10 層が墳丘盛土の崩落土であると考えられ、比較的早い時期に崩壊を始めたものと推察される。また、第 6・11 層内を中心に長さ約 30cm 大の砂岩系河原石が多量に検出された。特に西側では隙間がないほどの高密度で出土しており、墳丘を面的に覆う葺石・もしくは相当の高さをもつ石積の崩落に由来するものと考えられる。

周溝規模は、内径で最大 10.82m、最小 10.06m、最大幅 3.32m、最小幅 1.34m、西側における最深部の深さ 52cm であった。

主体部は、今回調査された古墳跡のうち、最大規模の玄室をもつ胴張り横穴式石室が検出された。地山に掘り込んだ堅穴をもって構築面が形成されている。主軸は N-20°-E であった。

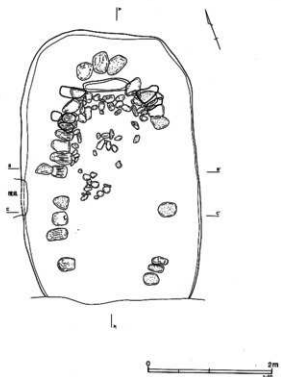


第224図 第15号墳土層図

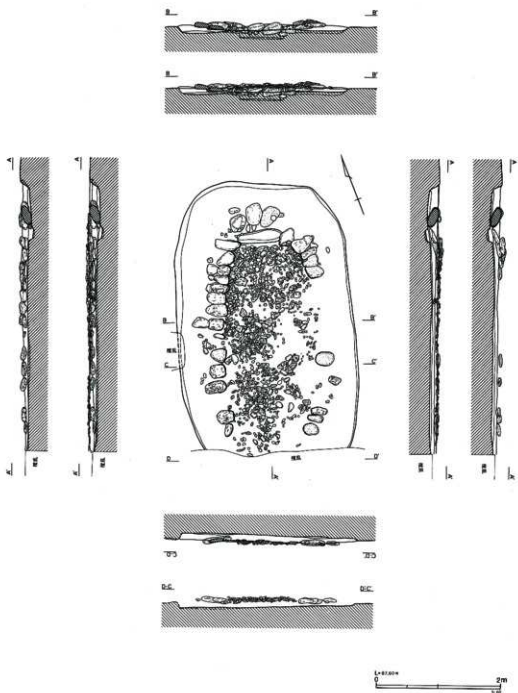
前庭部から玄門までが攪乱によって失われており、奥壁も抜き取られていた。

玄室は左右の側壁がほぼ対象で緩やかな膨張りをなし、点紋石墨片岩を中心とした結晶片岩および細一中粒砂岩の河原石を布積みにして構築されていた。工場建築物の解体にともなう攪乱で、右側側壁では根石まで失われていたが、部分的には2段目まで検出することができた。

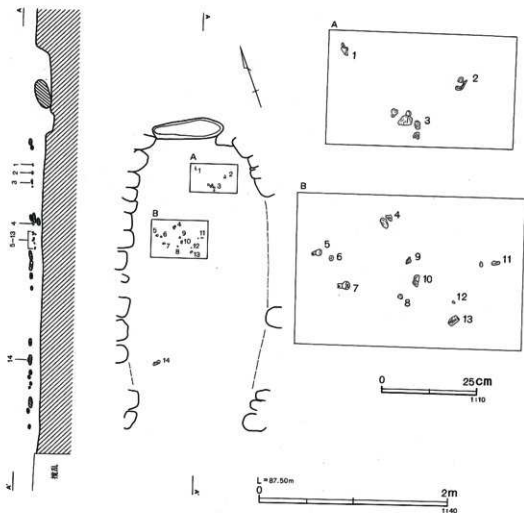
掘り方を確認する段階で、第6号墳石室と同様の奥壁設置孔が検出され、板石を用いて奥壁としていたことが確認された。しかし、玄室の奥幅62cmに対して、設置孔から復元できる板石の幅は



第225図 第15号墳石室根石



第226图 第15号填石室



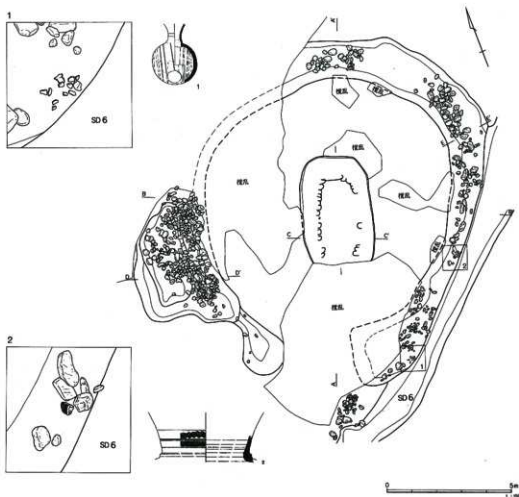
第227図 第15号墳人骨出土状態

40cm 前後と20cm ほど不足しており、板石の東側部分に河原石を積みあげて幅の不足を補い奥壁としていたものと捉えられる。板石の背後には玄室で最大の石材を配置し、さらにこれを積みあげて裏込めとし、補強していたものと推定される。

玄室床面には長径8～15cm ほどの玉石が敷き詰められ、磔床を構成していた。磔床上面には、成人骨1体分とみられる骨片・骨粉が散在していた。しかし、棺床面にも攪乱層が及び、玉石・人骨が散逸し、さらに石炭滓や産業廃棄物の破片が少なからず混入していた。

側壁根石には板状の結晶片岩が多用されるが、奥壁付近には扁平な細粒砂岩が多く用いられていた。根石を除くと、側壁は玄室奥以外に遺存しなかったため、根石と側壁最下段の石材における位置関係については明らかにできなかった。遺存部分には、第6号墳でみられたような顕著な「ずれ」は認められず、根石を含めて整然と小口積みされていた。

また、根石の配置状況からは、側壁の胴張り曲線が、直線的な根石の配列を複数連結することに



第228図 第15号墳遺物出土状態

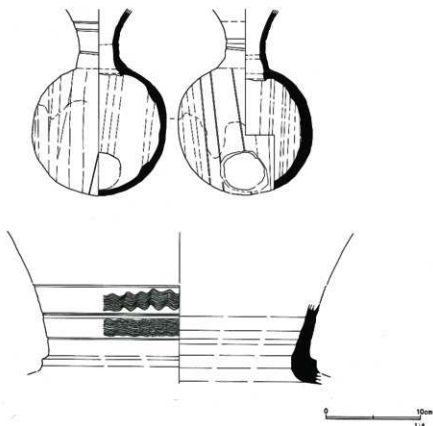
よって生みだされている様子が窺えた。

礫床面下には、長径10～22cmほどの扁平な石材を用いた基礎が据えられており、奥壁および側壁際を中心に敷き詰められていた。

石室規模は、玄室長315cm、奥幅62cm、最大幅151cm、前幅約100cmであった。

石室構築面の堅穴の平面形態は、最大幅の位置が玄室最大幅の位置に対応するなど、およそ側壁の胴張りに沿った曲線を描くが、全体としては隅丸方形であった。堅穴には細砂質シルトを用いた整地層（3層）を設け、さらに玉石・結晶片岩の割石を混合した細砂質シルト（2層）を敷いて石室構築面としていた。この工法は、第6号墳に共通する。しかし、第6号墳では割石を混合した整地層（3層）の範囲が側壁および裏込め範囲下面に限定されるのに対し、第15号墳では掘り方全面に認められた。側壁最下段の石材と根石の「ずれ」の関係が、整地層充填範囲の相違に起因する可能性もある。堅穴の規模は、検出された部分で全長436cm、最大幅288cm、深さ16cm以上であった。

出土遺物は、すべて周溝内から検出された。

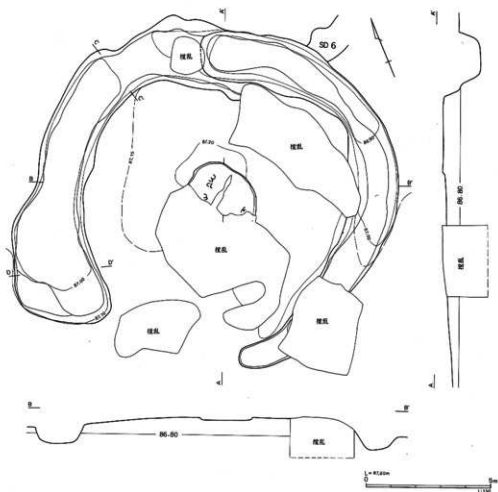


第229図 第15号墳出土遺物

1は須恵器フラスコ形細頸瓶である。前庭部相当位置前方の東側周溝底面付近より出土した。円形粘土板による蓋部の継ぎ目からはがれるように破損している。石室前庭部に置かれたものが土砂の流入にともない溝内に転落したものであろう。やや小形で、胴部はほぼ球形をなす。胴部および頸部には、それぞれ3条の弱い沈線が入る。調整は、胴部の粘土円盤による蓋部を中心に回転ヘラケズリが施される。焼成は良好で、胎土の外表面はにぶい赤褐色に、内面および断面はにぶい橙色に焼きしめる。頸部から胴部上半にかけて自然軸がかかり、オリーブ色に発色する。胎土には、石英、長石、細粒砂、白色粒を含み、非常に緻密である。なお、胴部4カ所に胎土目が認められる。胴部下方には円形の穿孔が施される。焼成後のもので、穿孔部分は激しく風化している。頸基部径5.6cm、頸部中央径4.4cm、胴部径15.8cm、胴部高13.4cm、推定高20.8cm、頸部推定高7.5cmである。口縁部を欠き、残存率は70%である。

2は、須恵器甕の頸部片である。東側周溝底面付近から出土した。2本一組の沈線で区画された2段以上の櫛描き波状紋帯をもち、頸部にいわゆる補強帯をもつ。焼成は良好で、外面は灰黄色、内面はにぶい褐色を呈する。胎土には石英、細粒砂、石英質小礫を含む。頸部補強帯径28.8cmを測る。墳丘方向からの土砂の流入にともなって流れ込んだ土器とみられる。

他に玄室内から1体分の人骨が出土した。骨粉は礫床上全面に散在していたが、脱灰が進み攪乱



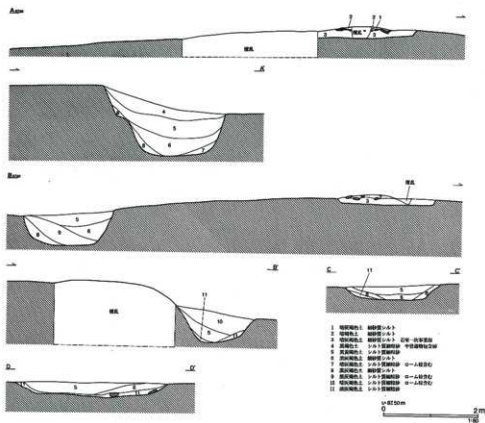
第230図 第16号墳

を受けたため、形状を留めるものは3カ所の範囲に限られた。Aに分布する骨片は頭蓋骨および下顎骨、犬歯(1)、大臼歯などで、頭部に関連した部位であった。Bには第1～第3大臼歯および長骨片などが分布していた。14は長骨片であり、周辺に濃密度の骨粉分布をみるが、形状を保つのは1片のみであった。なお、人骨については、森本岩太郎氏により成人1体分と鑑定された。詳細については付編2に譲る。

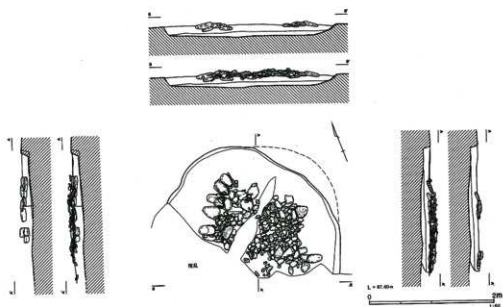
第16号墳 (第230～234図)

N-10・11・12、O-10・11・12グリッドに位置する。旧自然堤防の頂部に立地し、標高は87.2mであった。北東1.8mに第15号墳、東3.5mに第17号墳が隣接する。

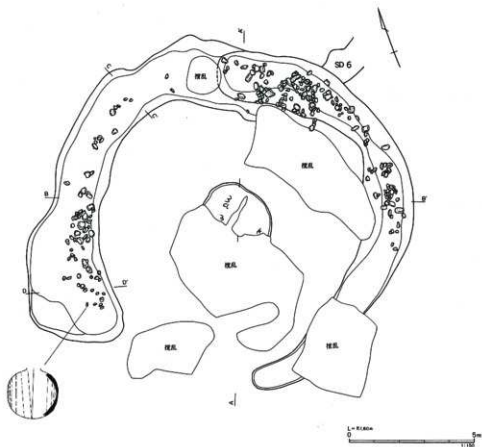
今回の調査範囲における古墳分布の南西端にあたるが、南方調査区外には、さらに古墳の存在を想定できる余地がみとめられた。西側には平安時代の集落跡が占地しており、集落跡と古墳群相互



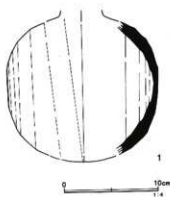
第231図 第16号墳土層図



第232図 第16号墳石室



第233図 第16号墳遺物出土状態



第234図 第16号墳出土遺物

の分布には重複関係がみられなかった。これは平安時代の集落跡が古墳群を避けて展開したことを示すものとみられ、古墳分布は第16号墳をもって収束する蓋然性が高い。なお、古墳群の墓域を区画する人工的施設および自然地形等は検出されなかった。

墳丘は旧自然堤防頂部にあたる微高地を利用して構築されたため、若干の高まりを有するが、盛土部分は完全に削平されていた。

周溝は、平面形態が不整な円形を呈し東西にやや扁平である。南西部で著しく幅を増す以外、ほぼ一定幅に掘削されていた。また、古墳中央部を起点にしてS-39°-Wの方位には陸橋部を有する。断面形態は整った逆台形を呈し、直線的に立ち上がっていた。底面のレベルは西から北側にかけて一定であっ

たが、北東部でテラス状部分をともない深さを増していた。複数段階に分かれる掘削の結果であると思われるが、覆土に重複関係はみられず、墳丘構築にともなう土量確保のための方途であったと推定される。陸橋部東側の周溝端部付近は、きわめて浅く検出が困難であった。耕作などにともない、石室の南西部を含めて削平されたものであろう。

周溝規模は、内径で最大11.22m、最小10.26m、南西部で最大幅3.38m、陸橋部東側で最小幅1.06m、最深部の深さ1.30mであった。

周溝内には径30cm程度の河原石が散在し、西側・北側を中心に密度を増していた。これらは石積・葺石の存在を推定させるが、多くが第5・6層内から出土しており、墳丘の崩壊に至るまでに一定の時間が経過していることを示している。

なお、周溝内の堆積土壌上層には第6号溝が存在するが、攪乱・削平等のため延長方向などについて確認することができなかった。

主体部は、胴張りをもつ横穴式石室が検出された。工場建築物の基礎による攪乱のため、石室の大半が失われており、玄室奥部のみが遺存したものである。堅穴の掘り込みをもって石室構築面とするものであるが、これを含めて攪乱されているため、石室規模の推定は難しい。

玄室側壁は、長さ25～30cmほどの扁平な砂岩系河原石を布積みにして構築され、緩やかな胴張りを呈し、玄室中央に最大幅をもつ形態であると思われる。結晶片岩の割合は他の古墳に比べ著しく低かった。右側側壁は、盗掘坑と思われる近世以前の攪乱によって破壊されていた。奥壁は抜き取られ設置孔もみられないため、形態・石材ともに不明であるが、群構成を考えると板石を用いたものと推定される。玄室床面には、長径10～20cm程度の扁平な玉石が敷設され、礫床をなしていた。下面に明確な基礎石材は用いられていない。

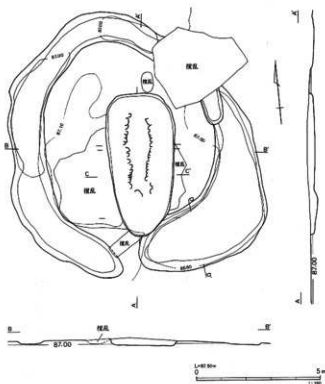
根石は細粒砂岩を多用したもので、部分的に結晶片岩が混在するが規則性はみられなかった。奥壁付近には礫床面下に細粒砂岩の河原石が設置されているが、これらは奥壁設置に際して補強材として用いられたものであろう。

石室構築面の堅穴は、遺存部分についてほぼ玄室の胴張りプランに沿った形状を示していた。断面は逆台形を呈し、深さ15cm前後で立ち上がりは急であった。東側の奥壁付近では、裏込めにとって十分な空間が与えられていない場合も想定できるが、削平された掘り方上部では、地山が暗色に変色しており、裏込めの範囲が破線部分まで広がるものと推定される。なお、玄室遺存部中央には近世の溝状の攪乱が入り、周辺から人間の白歯のエナメル質粉がわずかに出土した。

石室規模は、玄室奥幅約74cm、玄室最大幅約156cm前後であり、主軸はN-22°-Eを指すものと推定される。この推定値からみると、第15号墳と同規模の石室であったと思われ、位置関係や主軸方位にも類似関係が指摘できる。

出土遺物は周溝内から検出された。

1は須恵器フラスコ形細頸瓶である。胴部はほぼ球形を呈し、回転ヘラケズリが施される。焼成は良好で、胎土外面は灰黄色に、内面は灰白色に焼きしめる。軸は一部でやや溶け残るが、全体としては灰オリブ色に発色する。胎土は石英・長石・細粒砂を含み、緻密である。胴部最大径で推定16cmである。



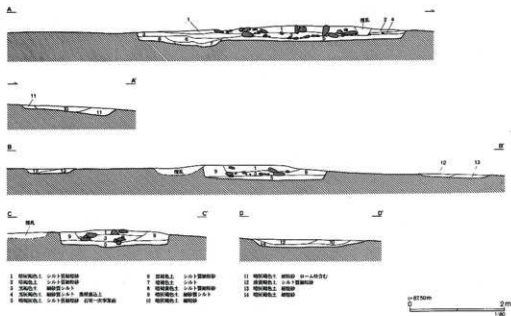
第235図 第17号墳

第17号墳 (第235～239図)

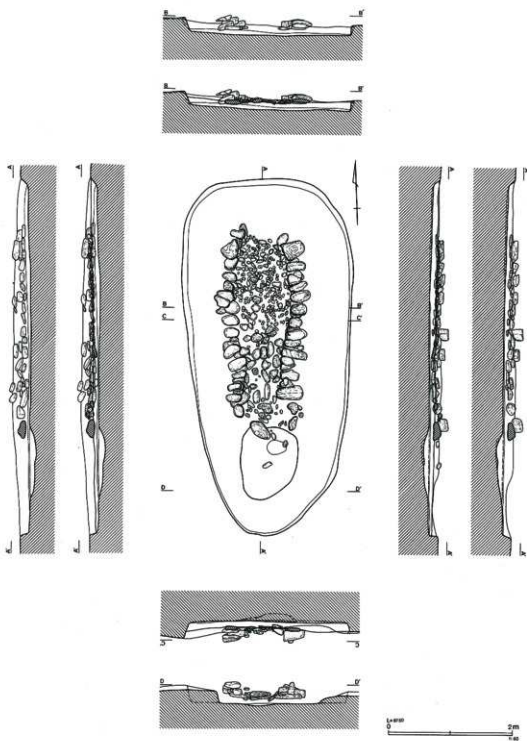
N-12・13、O-12・13グリッドに位置する。旧自然堤防の南斜面に立地し、標高は約87.1mであった。北東1.0mに第18号墳、北西1.8mに第15号墳、西3.5mに第16号墳が隣接する。

外部施設では、墳丘は完全に削平され周溝のみが検出された。

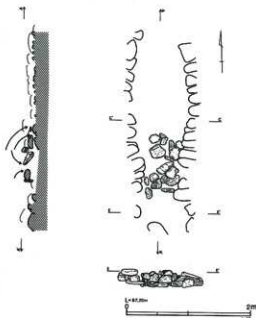
周溝の平面形態は、西側が南北にやや扁平であったのに対し、北東側では第18号墳を避けるように内側に歪んでいた。このため東側部分の面積が矮小化し、周溝の内側は不整な円形を呈していた。主体部前方には陸橋部が認められた。古墳中央を起点とした方位はS-9°-Wであった。周溝幅は西



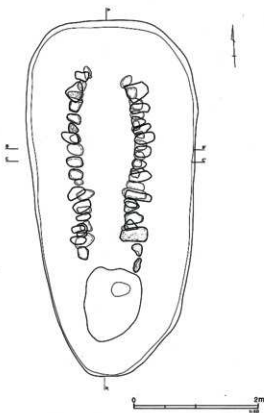
第236図 第17号墳土層図



第237图 第17号墳石室



第238図 第17号墳石室閉塞施設



第239図 第17号墳石室根石

側ではほぼ一定であったが、東側に至り急激に拡大していた。断面形態は、一般に不整な逆台形であった。底面のレベルはほぼ一定であったが、北東部の一部で土坑状となっていた。

周溝規模は、内径で最大7.52m、最小6.80m、最大幅2.88m、最小幅1.04m、最深部の深さ16cmであった。群中では第9・11号墳に次ぐ小規模古墳である。周溝内には河原石等の出土はみられず、石積・葺石等の存在を示す材料はなかった。

主体部には、小形の胴張り横穴式石室が検出された。堅穴の掘り込みをもって石室構築面としていた。群中では最も遺存状態のよい例で、上部構造・奥壁を失っているものの、玄室から前庭部に至る平面構成を捉えることができた。主軸方位はN-5°-Eであった。

玄室の平面形は、主軸線についてほぼ左右対称で、中央に最大幅をもち、緩い胴張りを呈していた。側壁は、長さ60cm大で厚みのある扁平な細粒砂岩河原石を主体とし、布積みによって構築されていた。結晶片岩は、点紋石墨片岩等が少量混在するに過ぎなかった。また、他の古墳にみられるような小形の石材によって間隙を充填する方法はとらず、ほぼ大形石材のみで構築されていた。床面には径

5cm程度および15cmを越える大きさを中心とする、2種類の玉石が不規則に敷設され、礫床を構成していた。礫床および側壁石材の状況から、奥壁は主軸に対して傾いていたものと思われる。

玄門は東側にやや大きめの石材が用いられ、側面において区画を示すが、内部空間に突出させようとする意図はみられなかった。

羨道は羨門の石材を除き、すべて細～中粒砂岩の布積みによって構築されていた。短く直線的で、極めて幅狭く、56cmであった。羨道部の床面には、長さ20cm大の扁平な砂岩系河原石が敷かれ、玄室の棺床面とは明確に区別されていた。

閉塞施設は、羨門から玄門に至る羨道部に設けられており、羨門付近には塊状の石材が、玄門付近には扁平な緑泥片岩が検出された。

明確な形態の前庭部は認められなかったが、羨門の外側70cmの範囲を中心に、羨道床面に準ずる石材が分布していた。左右縁辺には扁平で大形の石材が置かれ、上部構造をもった可能性もある。

根石は、玄室・羨道とも長さ16～25cmの扁平な細粒砂岩河原石が主体で、一部に片岩が用いられていた。玄門を除き、側壁と根石に「ずれ」は認められなかった。側壁石材は、根石石材との大きさの差異により、「ずれ」を用いずに外向傾斜を得たものであろう。

石室規模は、全長262cm、玄室長188cm、同奥幅54cm、同最大幅86cm、同前幅64cm、羨道長74cm、同幅56cmであった。前庭部を除くと、第11号墳に次いで小形の石室であった。

石室構築面の堅穴は前庭部側にやや尖る変形楕円形を呈し、前庭部下に土坑状の掘り込みを有することが特徴的である。断面形は逆台形で、立ち上がりは東側ではほぼ垂直、西側でも急であった。この掘り込みは第18号墳にも認められ、ともに整地時点で埋め戻されていた。石室構築に関連した施設と推定される。堅穴の規模は、全長568cm、最大幅276cm、深さ28cmであった。

第18号墳（第240～244図）

M-12・13・14、N-12・13・14グリッドに位置する。旧自然堤防の南斜面に立地し、標高は87.1mであった。西側に位置する第15号墳とは、接するか重複したものと思われる。しかし、第6号溝による破壊のため、正確な関係は把握できなかった。北3.6mに第5号墳、東4.2mに第8号墳、南西1.0mに第17号墳が隣接していた。第18号墳から第8号墳の占地する旧自然堤防南斜面は、最下位段丘崖に向かい傾斜角が増している。第18号墳の墳丘は、本来こうした旧自然堤防の高まりから南斜面にかけての比高差を利用して築造されたものと推定され、形態も微地形の影響を受けたものと思われる。

外部施設では、墳丘はすでに削平され周溝のみが遺存していた。

周溝の平面形態は東西に著しく長い不整な円形を呈し、石室構築面をなす堅穴が周溝の区画範囲外にのびることが特徴である。耕作による攪乱と工場建設にともなう削平・整地によって、検出時点で、当時の地表を構成した土壌の多くが失われていたため、確認できた周溝は底面付近に限られた。北東部に陸橋状の周溝の切れ目が存在するが、これはきわめて浅い周溝の上部が削平され、底面が露出し見かけ上陸橋状となったものであり、地山は溝底部分が暗色化しており、意図的に掘り残した部分ではなかった。陸橋部は87.10mの等高線の在り方からみて、主体部前方に存在する掘